

[資料紹介]

中国人大学生が読んだ日本文学

—中国惠州学院との共同教育・研究提携の成果報告③—

泉 敬史・康 伝金

早いもので、本学と中国広東省惠州市の惠州学院との共同教育・研究提携は6年目を迎えている。いくつもの提携項目が充実度を加えながら継続されており、毎年の研究教員の受け入れが今までに5人、交換留学生の受け入れが10人、現地海外研修生としての本学学生の派遣は延べ50人以上とその数を重ねている。札幌と惠州、北海道と広東省というそれぞれの地が、この提携に関わった多くの学生・教員にとって互いの第二の故郷とも言えそうな強い絆で結ばれつつあることを関係各位とともに喜びたい。

本稿も、そういった提携項目の一つに掲げた共同教育の成果として、惠州学院外国語学部日本語学科の学生諸君が卒業課題で取り組んだ論文の中から、両校の審査を経た5篇を掲載するものである。論文作成にあたっては各論の冒頭にお名前を付記した先生方がキメ細かく思慮深い指導に当たられ、結果として、4年間の大学での言語教育が、それもほぼゼロからの日本語教育がここまでの成果を生み得ることを実証している。「キメ細かく思慮深い」と言うのは私(泉)が抱いた印象であるが、文章の形を整えること以上に、よく考えて読み、気づいたり感じたことをしっかり書き込むことを求める指導ぶりをさしており、日本語の記述にやや不完全な箇所があったとしても、ぜひ全篇に目を通していただき、実証された中身をご確認いただきたい。また、本紀要に紙数をいただくのはこれが3年目であるが、過去の2年間でも何篇かで取り上げられてきた、芥川龍之介・太宰治・宮沢賢治・村上春樹といった中国の学生諸君に人気の高い日本人作家の作品に加え、今回初めて文学作品ではなく、日本語と中国語の「的」の用法という、言語比較に関する論考をした論文が掲載作として選ばれたことは、学生諸君の視野の広がりを感じるとともに、今後への期待がさらに高まる思いである。

芥川龍之介の『河童』と魯迅の『狂人日記』についての比較研究

惠州学院外国語学院2018年度卒業生 陳波

■指導教員 李樂、康伝金

講評

芥川龍之介と魯迅は同一時代の作家である。そして、二人の作家も暗い封建社会に生きていた。当時の社会に不満を持って、激しく批判するように、『河童』と『狂人日記』が作られた。この論文は、相似な時代背景で、二つの作品はどのような類似点や相違点があるのかについて研究を展開する。主に時代背景から、手法の修辞手法と象徴意義から類似点を分析する。そして、内容の環境描写と登場人物の設定から比較する。また、手法と内容から相違点を比較する。同じ方面から類似点と相違点を分析して、最後に差異が存在する原因を獲得することができる。

はじめに

芥川龍之介(1892 - 1927)は日本の有名な短編小説家で、俳号は我鬼だった。彼は短い人生で数え切れない作品を残してくれた。1927年発表した『河童』は芥川龍之介の最後の小説で、晩年の代表作だった。政治、文化、愛情、哲学、そして宗教や法律なども含めて、人間の悪や社会の闇を批判して、誠に「日本の狂人日記」と言われた。

芥川龍之介と同時代の中国では、魯迅は当時の中国の文壇で非常に重要な作家である。芥川龍之介は「日本の魯迅」と言われた。芥川龍之介と魯迅の小説作品は重要な一つ共通点、すなわち彼たちは人間の悪や社会の闇を痛烈に批判し、複雑な社会の善悪を探求して、深い人生意義を持っている。これによって、世に広く認められている。魯迅の『狂人日記』は、大正1918年に雑誌『新青年』に発表された、魯迅の処女作である。

张婉煦（2015）は「芥川龙之介与鲁迅作品比较研究」の中で、第一章は『河童』と『狂人日記』の比較である。二つの作品を別に分析して、世の闇を披露した。また、二つの作品に何らかの関係があるかどうか質問したところ、何か関係がありそうと答えた。陈学岚（2002）は「芥川龍之介と魯迅の比較研究」の中で、まず魯迅と芥川の古典物を取材方法や創作方式、言葉の特徴などの面から比較して、両者の違いを分析した。

文化精神が似た同時代の作家として、芥川龍之介の『河童』と魯迅の『狂人日記』はもちろん類似点と相違点がある。本論は創作手法や内容から比較研究を展開する。まずは手法の修辞手法と象徴意義から類似点を分析する。そして、内容の環境描写と登場人物の設定から比較する。また、手法と内容の相違点も詳しく比較研究したいと思う。

比較研究をよく進むために、これから、まずは『河童』と『狂人日記』のあらすじを説明したいと思う。

1. 『河童』と『狂人日記』のあらすじについて

文学作品の比較研究に、最初はもちろんその作品の内容を理解することである。作品の精華としてのあらすじを通して、作品を簡単に分かることができる。作品をよく分析するため、これからは二作品のあらすじを説明したいと思う。

1.1 『河童』のあらすじ

『河童』は精神病患者を通して、人間社会と対立して似ている河童の国のことを陳述した。彼は驚いた時に河童の国に落ちた。目を覚ました後彼はいろんな角度で河童の国を観察した。だんだん河童の国のイメージが変わるようになった。彼は河童社会の弊害や悪に気づいた。人間社会に戻る通路を見つけたとき、彼は「僕は飛行機を見た子供のやうに実際飛び上つて喜びました。」

しかし、人間社会に戻った後彼は、河童社会より人間社会のほうがもっ

と暗いと思っていた。彼は人間社会に絶望した。

僕はまた河童の国へ帰りたと思ひ出しました。さうです。「行きたい」ではありません。「帰りた」と思ひ出したのです。河童の国は当時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。

彼は河童の国に戻っても、人間社会に生きていることを断った。

同じ時代の作品として、『河童』と似ている魯迅の『狂人日記』はどんな物語を陳述しているのか。これから説明したいと思う。

1.2 『狂人日記』のあらすじ

『狂人日記』第一人称を角度として、「狂人」の物語を陳述した。「狂人」はすべての人が彼を傷つけて、彼を食べたいのだと思っていた。彼を診察した医者「ちゃんと休んでください」と言われた「狂人」は、その医者がもっと太った自分を食べたいと思っていた。「狂人」の妹が死んだとき、彼は妹がお兄さんに食べられたと思っていた。とうとう「全快」になった「狂人」はもう周りの環境が変わることを止めた。彼はもう絶望した。

同じような時代背景で作られた『河童』と『狂人日記』はどのような類似点があるのか。これから、手法と内容から分析したいと思う。

2. 『河童』と『狂人日記』における類似点について

『河童』と『狂人日記』は同じ時期の作品で、二つの作品とも当時の社会の闇を披露した。内容や修辞手法にも様々な類似点がある。二人の作者は、当時の社会に失望した状態で、作品を創作した。この二つの作品も各方面から社会を批判した。

2.1 手法における類似点

芥川龍之介の『河童』は架空の世界を作って、簡単な文字を使って、読

者に当時の社会の闇を見させた。魯迅の『狂人日記』も「狂人」という人を通して、隠喩の手法を使って、自分が当時の社会を改造したい気持ちや当時の知識人の弱さを現れた。

2.1.1 対比修辞

二つの作品は「狂人」というイメージを作って、「食人」社会を批判している。魯迅の『狂人日記』は中国現代小説の始まりとして、新文化運動と社会改善の役割を果たしている。そのためには、当時の社会の現状や旧宗教の批判が欠かせない。一方、芥川龍之介の『河童』は1925年に発表しているが、当時、芥川自身の生活経験と敏感な性格のため、彼は社会に対して失望と矛盾した感情に満ちている。芥川龍之介の絶命の作品として、『河童』も当然社会や宗教を批判した。本を読んだら、二つの作品がこの面の類似点を見つけることができる。『河童』の第八章で、ゲエルは

手近いテーブルのうえにあったサンドイッチの皿を勧めながら、恬然と僕にこう言いました。「どうですか？一つとりませんか？これも職工のですがね。」

『狂人日記』で、

わたしもそれを知らないのじゃないがハッキリ覚えていないので歴史を開けてみると、その歴史には年代がなく曲り歪んで、どの紙の上にも『仁道義徳』というような文字が書いてあった。ずっと睡らずに夜中まで見詰めていると、文字の間からようやく文字が見え出して来た。本いっぱいに書き詰めてあるのが「食人」の二字。

芥川龍之介も魯迅も、当時の社会の「食人」という現状を見て、「食人」を暴くことで、『河童』と『狂人日記』は期せずして一致した。

2.1.2 象徴意義

『河童』は河童国の見聞によって我々に巨大で詳しい河童社会を描いてくれた。語り手はこの現実社会に反して河童社会に無力や絶望を満ちた。第八章で、

「僕」がゲエルに断った。

それはちょうど家々の空に星明かりも見えない荒れ模様の夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ帰りながら、のべつ幕なし反吐を吐きました。夜目にも白じらと流れる反吐を。

そして、第十四章で、

大寺院はどんより曇った空にやはり高い塔や円屋根を無数の触手のように伸ばしています。なにか砂漠の空に見える蟹気楼の無気味さを漂わせたまま。

これは「僕」が宗教聖地を見学した後での描写。宗教や信仰の権威も追放されたことも見られる。生きている理由は見つけられない。芥川龍之介の絶望はそこに出了。『狂人日記』で、「狂人」という人は啓蒙者を象徴していた。しかし、社会関係の不平のため、「狂人」の話が無効になった。「狂人」は自分が救われないことが分かったから、自分や社会への絶望が生まれた。だからこそ、希望を未来の子供に託した。魯迅は未来に希望を託す。しかし、『狂人日記』でわからない未来に魯迅も絶望を感じた。『河童』の絶望は、作者のこの世界への最後の宣告であり、『狂人日記』の絶望は希望と同じな虚妄である。両作者とも小説の架空の世界によって、現実世界に対しての絶望を象徴した。『河童』も『狂人日記』も、現実社会の縮図である。

2.2 内容における類似点

芥川龍之介が書いた河童の国は、まるで人間の世界の縮図である。一連の荒唐無稽な法律、風俗、国家制度と生存の法則がある。芥川は我々に一つ奇妙な世界を紹介してくれるようになった。しかし、そのでたらめなコートを捨てて、私たちはその真実のために考え込んでしまう——ひとつ現実的で真面目な国。河童の国の政治は整然としているように見えるけれど。実は支配者のおもちゃのようで、河童たちは、この国の働きの道具にすぎない。どのような生活をするのかを選択する権力はないだけでなく、自分の生死を支配することもできない。

『狂人日記』は日記を形として、我々に一人の「狂人」が現実に対する悲憤や叫びを出すことを紹介した。また、現状を変えるために「狂気」に抵抗した。魯迅が書いた「狂人」は反逆の心理を持つ人である。彼は封建制度に包まれた家庭に育ったけれど、やはり反抗の心が生まれた。しかし、そんな社会環境に、本当に反抗することは言わない、反抗しようという考えも許されないことである。だから、主人公は人々の口の中のいわゆる「狂人」になった。人々が彼の考えを理解不能だけでなく、「迫害狂」を患う不正常な人間と思っていた。『狂人日記』はこの「狂人」がその暗い社会に、執着して孤独に戦っていたことを記載している。

2.2.1 環境描写

社会環境は、特定の歴史の段階においてすべての社会関係の総和である。そして、文学作品の人物の活動の広大なプラットフォームと空間である。それは人物の性格を決めていて、人物の行動を支配していて、人物の運命を握っている。

『河童』で、「大寺院はどんより曇った空にやはり高い塔や円屋根を無数の触手のように伸ばしています。なにか砂漠の空に見える蟹気楼の無気味さを漂わせたまま。……」と書いたところがあるが、ここの環境描写は宗教聖地——大寺院の描写である。「無数の触手」は同時の社会に宗教の居場所はもうなくなった。「砂漠の空に見える蟹気楼」の意味はこの世界

の信仰は砂漠の空に見える蜃気楼のようで、虚妄の存在である。芥川龍之介は環境描写を使って、自分の絶望をすべて展示された。

『狂人日記』で、「真黒けのけで、昼かしらん夜かしらん。趙家の犬が哭き出しやがる。獅子に似た兇心、兎の怯懦、狐狸の狡猾……」と書いたところがあるが、これは第六章のすべての内容である。「真っ黒」なのに、「昼かしらん夜かしらん」、それは当時の社会の混乱を比喩した。「趙家の犬が哭き出しやがる」は間もなくなに恐怖なことが出ることを暗示した。「獅子に似た兇心、兎の怯懦、狐狸の狡猾」は動物の特徴を利用して、人間の悪さや狡さを現した。

二つの作品とも環境描写を利用して、社会の闇と人間の悪性を表わした。

2.2.2 登場人物の設定

『河童』と『狂人日記』の主人公は精神病患者をモデルとしていた。ここは「狂人」というイメージを総称している。芥川龍之介の母は精神病を患っていた。魯迅は元医者であった。そして彼の従弟は精神病を患っていた。このような現実の経験は『河童』と『狂人日記』に創作モデルを提供した。また、『河童』と『狂人日記』の序言で、「狂人」の描写は、他人の視点で書かれていた。『河童』で、

これは或精神病院の患者、——第二十三号が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を越してゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。

芥川龍之介が書いた「狂人」のイメージと魯迅の『狂人日記』の「狂人」のイメージは重なりあう。『狂人日記』の序言で、

某君兄弟数人はいずれもわたしの中学時代の友達で、久しく別れているうち便りも途絶えがちになった。先頃ふと大病に罹った者があると聞いて、故郷に帰る途中立寄ってみるとわずかに一人に会った。

病気に罹ったのはその人の弟で、君がせっかく訪ねて来てくれたが、本人はもうスッキリ全快して官吏候補となり某地へ赴任したと語り、大笑いして二冊の日記を出した。これを見ると当時の病状がよくわかる。旧友諸君に献じてもいいというので、持ち帰って一読してみると、病気は迫害狂の類で、話がすこぶるこんがらがり、筋が通らず出鱈目が多い。日附は書いてないが墨色も書体も一様でないところを見ると、一時に書いたものでないことが明らかで、間々連絡がついている。専門家が見たらこれでも何かの役に立つかと思って、言葉の誤りは一字もなおさず、記事中の姓名だけを取換えて一篇にまとめてみた。書名は本人平癒後自ら題したもので、そのまま用いた。

この序文から「狂人」の年齢を推計することができる。魯迅の親友の弟であったけれども、魯迅は当時38歳で、当時の社会的な家庭関係によると、親友の弟は30歳を超えたはずであった。『河童』の「狂人」も「彼はもう三十を越しているであらう。」だから、『河童』と『狂人日記』の「狂人」の年齢は基本的に一致している。また、二作品の「狂人」の病気も似ている。『河童』で、

尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反（ぞ）らせたりした。……

彼は最後に身を起すが早いのか、忽ち拳骨をふりまはしながら、誰にでもかう怒鳴りつけるであらう。

このような描写は、狂人の生理的な病気の真実性を説明する。魯迅は直接序文で書いた。

旧友諸君に献じてもいいというので、持ち帰って一読してみると、病気は迫害狂の類で、話がすこぶるこんがらがり、筋が通らず出鱈目が多い。

芥川龍之介も魯迅もそれぞれ文章の中で「狂人」の病名を表明した。二作者は「狂人」のイメージを作った上に、目的動機は似ていて、二作品の主人公は「病氣」がある「狂人」である。

『河童』と『狂人日記』は手法と内容でこんなにたくさんの類似点があるけれども、別の作品としてももちろん相違点もあるはずである。これから、二つの作品の相違点を分析したいと思う。

3. 『河童』と『狂人日記』における相違点について

『河童』と『狂人日記』は同じ時期の作品で、二つの作品も当時の社会の闇を披露した。内容や修辞手法にも様々な類似点がある。しかし、相違点もたくさんあるはずである。それから、二作品の相違点を探したいと思う。

3.1 手法における相違点

芥川龍之介の『河童』の中には二人のナレーターがいる。魯迅の『狂人日記』にも「我」と「余」の二人のナレーターがいる。二作品も多声小説だが、その中の述べる視点の転換の差異がある。

『河童』で序言と最終章にも「僕」と「S博士」の視点が別に現れた。それは明らか「狂人」の視点ではなく、「正常な人間」の視点である。『河童』の最後で、「正常な人間」の視点は三文の括弧の叙述で現れた。「狂人」の言説を粉碎し、喋りの権利は正常な軌道に戻った。「狂人」の奇異な見聞とあの奇妙な河童の国も「正常な人間」の言説に解消された。『河童』の中で、述べる視点は二回変わった。最後のところの変化は『狂人日記』と違う。

『狂人日記』での「我」と「余」の多声皮肉の構造は人に称賛されている。確かに、魯迅はこの方面で芥川の『河童』より一頭地を抜く。『狂人日記』の多声は述べる視点の転換にあるだけではなく、文言と白話の対立にもあ

る。これは『河童』のただ述べる視点転換と違う。また、『狂人日記』のナレーターの二度目の転換は文章の最後にあるのではない。序言で指摘するのである、

病気に罹ったのはその人の弟で、君がせっかく訪ねて来てくれたが、本人はもうスッカリ全快して官吏候補となり某地へ赴任したと語り、大笑いして二冊の日記を出した。

「狂人」は結末で

救えよ救え。子供……

という言葉を残した。人の目覚めを望んだ。「狂人」は本当に治って正常な人間の世界にもどったのかもしれない。状況がひどくなって、「正常な人間」に排除されたかもしれない。

3.2 内容における相違点

手法はこんなたくさんの相違点がある。内容はもちろんいろいろな相違点があるはずである。これからは内容の相違点を分析したいと思う。

3.2.1 逃避と反抗

『河童』で、芥川龍之介が作った「狂人」は河童の国に入った。その河童の国と現実の世界は対応の関係である。第十章で、彼は河童を通して、この小説の一つの目的を書いた。

いえ、余り憂鬱ですから、逆まに世の中を眺めて見たのです。けれどもやはり同じことですね。

『河童』で、芥川は逆まに世の中を眺めて見たいと思った。彼が作った

河童の国は彼を現実の世界と違って奇妙な世界につれてきた。芥川はこの世界に不満があり、そして反抗の意識もあった。けれども、反抗より、逃避の意識がもっと強かった。現実の世界を離脱して、架空の河童の国を作った。そして河童の国でも彼は失望させられた。それで彼はまた河童の国から逃げて、現実に戻った。明らかに、「狂人」は現実を受け入れられなかった。だから文章の終わりにはまた逃げたいという欲望が出てきた。

僕はS博士さへ承知してくれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね……………

『河童』と違う、魯迅の『狂人日記』で、「狂人」も社会に不満があったけれど、彼は啓蒙者として、完全に架空の社会状況に陥ることはなかった。その上、彼は現実の社会のいろんな目色で「お兄さん」をはじめとする家庭制度に反抗していた。このような反抗は有効かどうかはしばらく置いて、一番重要なことは魯迅が書いた「狂人」は、彼が生きていた暗い社会で反抗を始めた。これは芥川龍之介の『河童』で、河童の国も現実の世界も逃避した「狂人」と全然違う。

3.2.2 晴らす対象

『河童』には皮肉な成分がある。けれども、全体的には寓意小説に属する。芥川龍之介の言葉でいえば、『河童』はすべての物事、特に自分に対する嫌悪感が発生したため作った作品である。彼は河童の世界を借りて、出産、遺伝、階級、恋愛、自殺などの問題を批判した。自分の心に抑圧された苦悩と悲しみを晴らした。架空の世界を通して、現実の世界の各方面を批判して、自分の不満を表示した。

『狂人日記』で魯迅は宗教への批判や感情を「狂人」の目の中で変化したイメージを通して表現した。たとえば、「趙家の犬」と子供の目である。『狂人日記』での批判の範囲はもっと広い。直接に封建的な宗教を指していた。『河童』では、資本生産、法律、哲学、宗教などの話題をもっと検

討していた。『河童』も『狂人日記』も自分の感情を十分に晴らして、当時の社会批判した。けれども、この二つの作品の訴えの指向は違うのである。

『河童』と『狂人日記』の相違点は内容で明らかに表現している。作者自身の気持ちも作品で表現している。なぜ似ている作品に差異がたくさんあるのか、これからはその差異の原因を分析したいと思う。

4. 『河童』と『狂人日記』の異同の原因

二作品の異同がある原因はたくさんあるけれども、本論は時代背景と両作者の成長経験の差異が最も重要な原因だと思う。

4.1 時代背景の原因

1918年の中国は社会変革の時代にあった。『狂人日記』の発表は当然に宗教と古い思想を取り除く重任を担った。だから『狂人日記』の矛先は「食人」という封建的な文化を指していた。『河童』は1927年に発表され、つまり昭和2年、当時の日本の資本主義はすでに長い間発展してきた。さまざまな矛盾が現れた。芥川も宗教哲学や社会に対する疑念があったので、『河童』で社会を批判するとともに宗教神や哲学などの精神も疑った。だから二つの作品は批判の内容と矛先の方向に違いがある。

4.2 二作者の成長経験の差異の原因

芥川の悲惨な人生経験は彼が世界を疑うことや人生に対しての失望を招いた。『河童』で、河童の国の教義は「生きる」である。けれども芥川龍之介は『河童』が発表された五ヶ月後自殺してしまった。それは芥川の死の前の社会と人生に対する総括的な訴えである。それは絶望と迷いに満ちていた。魯迅は「中国の魂」と言われていた。彼は不屈の精神があった。だから、『狂人日記』で、彼の伝統的な封建思想の批判が一番強かった。魯迅は本気で国民性を改造することができるのは人間の思想を変えるしか

ないと信じていた。そのため、芥川と比べて、魯迅はもっと深い方面から「食人」現象の本質を暴露した。

おわりに

『河童』と『狂人日記』を比較したことで、芥川龍之介の人生観がよくわかってきた。彼は傍観者の冷静さをもって、人間性と社会の闇を暴露した。しかし彼は魯迅のように現実社会を深く批判することはしなかった。人間性に失望したため、彼は最後、人間に絶望を感じた。国民性を注目した魯迅は鋭い筆鋒で旧社会の病根を批判した。封建社会に対して非情に風刺した。

『河童』と『狂人日記』は読者に絶望的な迷いの「狂人」と封建社会に反抗する戦士としての「狂人」を示している。本論文では、『河童』と『狂人日記』を比較研究して、芥川龍之介と魯迅と、彼らの創作特色を深く認識させられた。

本論はただ手法と内容から芥川龍之介の『河童』と魯迅の『狂人日記』を比較研究して、角度は特色があるけれど、まだ足りないと思っている。これから人物の性格分析の角度でもっと研究しようと思っている。

参考文献

- 1) 譚晶華『芥川龍之介作品選：日漢対照』高浩訳、上海外語教育出版社、2010年。
- 2) 魯迅『呐喊・彷徨』北京新潮社、1923年。
- 3) 小澤保博「芥川龍之介「河童」研究（下）」『琉球大学教育学部紀要』第80号、2012年、25-49頁。
- 4) サボー・ジュジャンナ「芥川龍之介の〈狂人語り小説〉—『二つの手紙』と『河童』を中心に—」『歴史文化社会論講座紀要』第12号、2015年、87-103頁。
- 5) 魯迅『魯迅選集』松枝茂夫・竹内好訳、岩波書店、1964年。
- 6) 関口安義「『河童』を読む—龍之介の生存への問いかけ」『都留文科大学研究紀要』第70号、2009年、37-58頁。

- 7) 和田勉「芥川龍之介論」『九州産業大学国際文化学部紀要』第35号、2016年、1-15頁。
- 8) 陈学嵐「芥川龍之介と魯迅の比較研究—古典物を中心に」、重慶大学外国語学院、2002年。
- 9) 李磊「論芥川龍之介《河童》的思想性」、河南大学、2013年。
- 10) 張婉熙「芥川龍之介と魯迅作品比較研究」、遼寧大学、2015年。
- 11) 孫庆君「『狂人日記』の深層意蘊論析」、東北師範大学、2002年。
- 12) 宋劍華「狂人の“病愈”と魯迅の“絶望”——『狂人日記』の反諷叙事と文本 释义」『学术月刊』第10号、2008年、99-105頁。

『銀河鉄道の夜』に見られる自己犠牲

惠州学院外国語学院2018年度卒業生 陳可欣

■指導教員 曾源深、康伝金

講評

『銀河鉄道の夜』は宮沢賢治生前未発表の作品で、賢治童話の代表作の一つである。主人公ジョバンニは夢の中で彼の友達であるカムパネルラと一緒に天国行きの列車に乗って旅に出る。ファンタジーな銀河世界の中で、ジョバンニは各種各様の人や物語と出会って、そして目覚めて、再び現実の世界に戻って本当の幸せを求める。この論文は、まず自己犠牲の意味を簡単に説明し、文献研究法と帰納推理法を利用して、作品中のカムパネルラの献身、家庭教師である青年の背景、蠅の火の伝説とジョバンニの心理変化を分析することで、宮沢賢治の法華信仰と関連して、『銀河鉄道の夜』に反映された自己犠牲を解読する。

はじめに

宮沢賢治は昭和時代前期の詩人、童話作家、農業指導家、教育家である。仏教篤信の家で育ったゆえに、日蓮宗の熱心な信者となる。盛岡高等農林学校卒業した彼は農民に熱心に稲作指導をし、そのため、法華経と農民生活に基づいて創作した作品も多い。短い人生に常に闘病生活をし、1933年急性肺炎で辞世した。生前彼の作品はほとんど無名であったが、没後、草野心平たちに発掘され、その作品も世界に注目される。『銀河鉄道の夜』は宮沢賢治生前未発表の作品で、未定稿のまま遺された賢治童話の代表作の一で、少年ジョバンニと友人カムパネルラが銀河鉄道に乗って旅をする物語である。天の川の画面が非常にファンタジーで、詩的な想像力が文章に溢れている。『銀河鉄道の夜』は幻想性、宇宙性と宗教性など賢治文学の特性が強く映し出される宮沢童話の代表作と言える。この作品の中で、「世界が全体幸福にならないうちに個人の幸福はあり得ない」という幸福論が反映されており、他人の痛みを慰撫できるのなら自己を犠牲しても構わないという理念が表された。今までの作品の集大成とも見なされてきた。この童話で宮沢賢治の自己犠牲を研究する価値が高いと考えられる。

宮沢賢治の作品は幻想性と宗教性などの特質は強い。この『銀河鉄道の夜』も宮沢色彩が濃厚であると思われる。先行研究について、国内外の学者はもう各方面と各角度から一定の研究があった。いくつか代表的な論文を上げれば、和田康友(1996:50)によって書かれた『宮沢賢治と自己犠牲』が日本文学誌要に発表され、中に『銀河鉄道の夜』も含まれて賢治の作品を分析し、「賢治の作品をよく吟味してみると、確かに自己犠牲は重要な位置を占めているにしても、そこにはある種の特殊性が含まれていることを認めざるを得ないのである。」と宮沢賢治の自己犠牲の特殊性を検証した。一方、人文科教育研究に収録された横山明弘(1989:35)の『宮沢童話における構造的な研究』は、弱肉強食を否定する構造から自己犠牲へきめ細かく解説し、「宮沢に対して自己犠牲は弱肉強食の輪廻から離脱するた

めの方法であったのである。」という観点を提出した。また、インド学者 George Pullattu Abraham (2007: 27-93) は宮沢賢治の作品から、「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」も考察した。さらに、2001年鎌田東二が書かれた『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』や1998年東光敬著の『銀河鉄道の夜をつくった宮沢賢治 宮沢賢治の生涯と作品』なども『銀河鉄道の夜』について研究を深めた。

人間社会の発展中、飢饉や貧困や戦争など我々に災難を与える悲劇には事欠かない。様々な原因で苦悩した人々の幸せを求め、自分の身を捨てるヒーローのような人物も多かった。即ち、自己犠牲の精神は常に存在している。拙論は『銀河鉄道の夜』を分析することによって、作品に反映された自己犠牲を考察し、『銀河鉄道の夜』の研究をもっと全面的になるため役に立つ考えを提出したい。

1. 自己犠牲について

自己犠牲は、時代の流れに順応する普遍的な道徳原則であろうか、あるいは社会のルールに規定される歴史の産物であろうか。また、自己犠牲は自己価値の目標を実現する唯一の形式であろうか、あるいはとある特殊な手段であろうか。自己犠牲という精神の現実的な価値を正しく揭示されなければ、人間の無関心や道徳に対する誤解は消しがたい。したがって自己犠牲の本質を把握したら、人生の追求と生きる意味はより崇高になり、社会のために貢献する情熱もより強くなれる。要するに、自己犠牲という道徳問題を新たな角度から探究するのは、現実生活から離脱した無意味なことではない。宮沢賢治の『グスコープドリの伝記』『よだかの星』などの童話で、「自己犠牲」を重要なテーマとなっている。まさに古典文学の中で自己犠牲的精神を推奨する作品の代表とも言える。拙論は、『銀河鉄道の夜』から、この作品に反映された自己犠牲のありさまを見極めたい。

1.1 自己犠牲とは

一般論の自己犠牲とは、他者や他の何かのために、自分の時間、労働力、命などをささげること。自己犠牲の行為は、一人の成長とともに引き出すものである。自分自身の利益にいつも優先ではならず、自分より他人の利益を先にするとき、人間は自己犠牲を選択する。

現実の生活にも、犠牲を選んだ人が様々いる。いくつか例をあげて説明する。日本で有名な塩狩峠列車暴走事故で、鉄道院の職員が暴走する蒸気機関車の前に身を挺して暴走を止めて、乗客を救った。アメリカのエア・フロリダ90便墜落事故で、一人の男性が二度女性に命綱を譲って、衰弱し力尽きて水面下に溺れる。

論理学には、自己犠牲に対する理解はもっと複雑である。例えば、田村均は言う。「自己犠牲的行為は、個人の不合理な行為であるか、個人でないものの合理的行動であるか、のいずれかにしかならない。」(田村均, 1997: 37-64) 自己犠牲の主体は「自分」であるので、自己犠牲的行為は成り立たないと指摘した。

1.2 自己犠牲の多義性

前述のごとく、自己犠牲的行為はもう社会によく存知された行為である。しかし、物事に対する見方は人によって異なる。自己犠牲も例外ではない。例えば、ドイツの思想家フリードリヒ・エンゲルスの作品『フォイエルバッハ論 (ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結)』で言及していた：「実際、道徳の基礎は個人の幸福を追求することではなく、全体的な幸福、すなわち全ての民族、階級、人類の幸福を追求することである。つまり、道徳の基礎は多少の自己犠牲を前提としたからこそ、成立できる」(フリードリヒ・エンゲルス, 1886)。取りも直さず、エンゲルスは自己犠牲を理論の角度で普遍の道徳原則として思いなす。

一方、「自己犠牲なんてただの自己満足だけだ」と認定した専門家もたくさんいる。彼らの理論にしてみると、自己犠牲も利己主義の一つで、ねじれた道徳である。

また、「自分さえ我慢して他者に譲ればいい」「謙譲が美德」などを常に自分を洗脳するような自己犠牲もあるが、これは自己主張が苦手だと考えられる。このような人たちはたぶん自分には価値がないと思っているだろう。自己愛性人格障害、境界性人格障害にかかった説もあるが、これは正論かどうかは暫く置いといて、こいう形式の自己犠牲はきつといずれ爆発してより厄介なことになると考えられる。

並びに、様々な宗教も自己犠牲を重視される。輪廻を信じる宗教は多くあるから、こいう宗教の教義は大体信者たちに犠牲しようと推奨する。ヨーロッパで、死後天上へ行けるように、一部の貴族は自分の部分財産を教会や孤児院に寄付する。イスラム教はなお、本教のために自己犠牲しようと信者たちに要求する——信徒は皆兄弟で、困ったときは、お互い助け合うべきである。仏教は特に因果応報を提唱する。教徒たちは生きる時善を行っていたら、来世はきつと幸せになれると信じている。

ゆえに、自己犠牲は多重な意味を持っている。宮沢賢治の信仰と人生の経歴は非常に特殊的なので、彼の作品に反映された自己犠牲も十分独特である。

2. 『銀河鉄道の夜』に現れた自己犠牲についての分析

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』中、「自己犠牲」は一つ重要な主題となっている。この物語の中で、自発的で選択した犠牲的行為もあるが、無意識で発生した自己犠牲もある。例えば、主人公の親友カムパネルラの献身は無意識で発生した結果だと言っても過言ではない。これは第一段階の自己犠牲である。そして、青年の家庭教師一同の死亡と蠅の火の伝説が次から次へと出てきて、自己犠牲の本当の意味を明らかにする。この旅で、ジョバンニも本当の幸福の意味を探して、自分が生きている目標もより明確になる。

2.1 カムパネルラの自己犠牲

カムパネルラは主人公ジョバンニの知友で、ジョバンニが出たこの銀河の旅の案内者とも言える。あの死者限定の銀河鉄道の上で、ジョバンニが乗っている一番合理的な理由は、友人のカムパネルラに対する強い思慕である。つまり、カムパネルラの犠牲はこの物語の始まりだと思っている。

カムパネルラの話しについて、彼のモデルは宮沢賢治の妹としだというのはもう大体の専門家に認められた。そして、主人公ジョバンニのモデルは宮沢賢治本人である。妹のとしは、宮沢賢治にとって、特別な存在であると考えられる。宮沢賢治の家族は浄土真宗を信奉しているが、賢治は日蓮宗を信奉したせいで、父親との関係が崩壊してしまった。あの時、賢治の選択を理解し、支えてあげたのは、妹のとしだけである。としは賢治と同じ、未知と真実を追求する願望を持っている。賢治の同人誌の最初な読者である彼女であるからこそ、賢治の理解者、精神的な支えになれると思う。その彼女の卒去が宮沢賢治に与えた巨大なショックは、『銀河鉄道の夜』を作り出す最大な要因であると考えられる。銀河の旅は、亡くした妹を天国へ送ってあげたいから仮想した旅である。それに、としの逝去を悼むために、宮沢賢治は『永訣の朝』という詩を書いた。

「ああとし子

死ぬといふいまごろになって

わたくしをいっしょうあかるくするために

こんなさっぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまっすぐにすすんでいくから

(あめゆじゅとてちてけんじゃ)

……

わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも

あんまりどこもまっしろなのだ
 あんなおそろしいみだれたそらから
 このうつくしい雪がきたのだ」(宮沢賢治, 1992: 32-33)

この詩で表現したい気持ちは『銀河鉄道の夜』のテーマと似ている。としの死亡で、宮沢賢治は孤独の深淵に落ち込んでいた。故に、彼の作品は濃厚な寂しい色彩がついていて、心の中の虚しさと切なさは覗ける。『銀河鉄道の夜』も宮沢賢治が妹のために書いた鎮魂歌であろう。心の絆の中で、銀河鉄道が生まれた。魂は本当の帰る場所にたどり着いた。

カムパネルラの自己犠牲は次から分析しよう。まず、作品の構造から見れば、カムパネルラの死亡は必然だと思っている。『銀河鉄道の夜』は全部九章に分け、その中で、前五章と最後の一章のエピローグは現実世界を述べていた。幻想世界の状況はただ四章だけの内容を占めている。こういう構造は童話のなかでも珍しい。大体の童話では、普通プロローグとして現実世界の人物が幻想世界に越えるきっかけを簡単に説明する。物語の重心は幻想の世界のことである。例えば、ルイス・キャロルの童話『鏡の国のアリス』(1865年)の中で、作者は三百文字もかからぬうちに、少女のアリスが白いウサギを追いかけて、ウサギ穴に落ちて不思議の国に迷い込んでしまった。しかし、宮沢賢治の書き方は常識はずれである。ジョバンニが銀河の旅に出る縁起を紹介するために、彼は五章の下地を準備した。そこで、本作のもう一つのテーマ——「孤独」は表した。間違いなく、主人公ジョバンニは孤独である。カムパネルラは彼のたった一人の友達なので、ジョバンニのカムパネルラに対する思いは一般程度以上強い。

しかし、物語の角度にしてみれば、カムパネルラの死亡はある程度の偶然性を持っている。カムパネルラは優しい心を持つ大人っぽい少年である。彼は、同級生のザネリを救うために、川に飛び込んで溺れてしまった。けれど、彼は自分が必ず死ぬという条件を存分に納得した上で、友達を助けないわけにはいかない。これは決まりきったことである。一人の十代の子供は、死の覚悟を抱いてクラスメイトの命を救うことはあり得ない

と推測している。もちろん、カムパネララの行動は確かに犠牲的行為に属する。彼は不幸な人に手を出すことに慣れていたから、あの時は躊躇わずに川に飛び込めるのである。しかし、死亡は予想できるものではない。第七章「北十字とプリオシン海岸」にカムパネララはいう。「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」（宮沢賢治，1969：34）。このセリフをよく味わったら、彼の自己犠牲は無意識で選択したことは明らかに分かる。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネララは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネララは、なにかほんとうに決心しているように見えました（宮沢賢治，1969：34-35）。

死者の魂は銀河鉄道に乗って理想の天国へいく。上記の文章のとおり、カムパネララの理想の天国は母親がいる場所である。「ああ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集つてるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あつ、あすこにゐるのはぼくのお母さんだよ」（宮沢賢治，1969：103）。カムパネララと母親を繋いだものは、宗教ではなく血縁の絆にほかならない。「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」という言葉で、読者たちもカムパネララのこころの矛盾をよく分かるようになった。儒家經典の『孝経』でも「身体髮膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり。」という言葉がある。自分は人の子として恐らく失格だろうと思いつつながら、彼は母が本当に幸せかどうかを怖れている。精一杯考えた結果、彼は、誰にかかわらず正しいことをしたら必ず幸

せになれるはずだと、自分を慰める。母親はきっと自分を許してくれるだろうと信じている。カムパネルラの献身は無意識で選んだ行為で、外在の不可抗力は自分自身の意志より強烈である。したがって、これを低次の「自己犠牲」と見なす。同時に、彼は母親の幸福、即ち個人の幸福を望んでいる。これも低次の幸福追求であると考えられる。

2.2 家庭教師である青年の自己犠牲

もし「自己犠牲」を三つの階段に分けるのなら、カムパネルラの献身は第一階段の「自己犠牲」に属し、青年の家庭教師一同の死亡は第二階段のものであると推測している。黒い洋服を着ていて背が高い青年は、キリスト教徒であり、姉弟の家庭教師をしている。船が氷山にぶつかって沈んでいく際、彼は両難の境地に陥った。ほかの子供を押しつけて、かおる姉弟を救い、自分の義務を尽くしたいと考えながら、ほかの子供を犠牲して自分の学生を救うより、いっそ彼達を神のお前に送って行くほうが、本当の居場所に至れ、彼らにとっても本当の幸福であろうと青年は考えていた。結局、彼は覚悟を決めて、船が完全に沈むのを待っている……家庭教師の青年と姉弟の死亡に、キリスト教要素と哀れな雰囲気を感じられる。

その場合、青年教師は死の覚悟を決めてキリスト教徒としてふさわしい選択を選んだ。彼は、この旅が終わったら必ず神のところに近づけるであろうと深く信じている。それにしても、青年一同のやり取りの中で、妙に悲しい空気が溢れている。死の本当の意味はまだ知らない五歳の弟は、もう死の世界に行かなければならない、死の模様を直面しなければならなくなった。お姉さんはあの船に乗らなければよかったと思って明らかに後悔している。青年教師も実は自分のやり方は正しいかどうかを悩んで多少動揺している。

「そのとき汽車のずうっとうしろの方からあの聞きなれた〔約二字分空白〕番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさっと顔いろが青ざめ、たって一ぺん

そっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました」(宮沢賢治, 1992: 65)。

そして最後、青年はどんなに悲しくてもそれが正しい道で進むのならきっと本当の幸福に至ると燈台守に祈るように答えている。彼は宗教における真の幸福を解説した——キリスト教の教義では、多数の人の幸せを求めするために、自分を犠牲しても必要があると教え諭している。複数の選択肢に向かった時、青年は決断を下した。だからこそ、彼の「自己犠牲」はある程度の自覚性を持っていると判断する。

しかし、青年に決断を下させたのは、自分自身の意志ではなく、神の指示である。これも外力の要因に属する。周知されたキリスト教の最も共通的な「ニカイア信条」にも、「わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。罪のゆるしをもたらず唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます」のような内容がある。神に対する信仰の力をもとにして、青年は自己犠牲を選んだが、ちょっとネガティブな感じがする。これを第二階段の「自己犠牲」に見なされると思う。この行為も青年一同に彼らの本当の幸福に導いていく。

2.3 伝説「蠍の火」の自己犠牲

カムパネルラと青年の家庭教師はそれぞれの自己犠牲的行為をし、「本当の幸福」の意味も自分なりに相応しい解説をした。しかし、一番上級な自己犠牲と本当の幸福は一体なんだろう。ジョバンニとカムパネルラはようやく蠍の火と出会った。この星座の伝説から、筆者は完璧な説明を見つけた。

むかしのバルドラの野原に一びきの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附かって食べられそうになったんですって。さそりは一生存命遁げて逃げたけどどうとういたちに押えられそうになったわ、そのときいきなり前に

井戸があってその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたというの、ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことみんなの幸のために私のかからだをおつかい下さい。って云ったというの。そしたらいつか蠅はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ（宮沢賢治，1992：93-94）。

このストーリーを持ち出されると、宮沢賢治のもう一つの異曲同工な作品「よだかの星」のはなしも言わざるを得ない。醜く、弱いよだかは鳥の国に嫌われ、村八分にされる。鷹の殺戮から逃げ出すために、彼は遙かな天国へ飛んでいく。「どうか私をあなたの所へ連れてって下さい」と彼は星様たちに願ったが、星様たちに断りされた。最後の最後、よだかは自分の力を尽くし空に飛び、星になった。「そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています」（宮沢賢治，1987：16）。

二つの伝説から、宮沢賢治が築いた象限の一つ——「焼身幻想」も出てきた。見田宗介の『宮沢賢治—存在の祭りの中へ—』中にも言及している。見田の観点によると、宮沢賢治は自身の罪を気づき、自我を燃やしたいから、焼身幻想を求めている。さそりの罪はかつて多くの命をたべてしまったことであり、よだかのは自分が弱すぎて鳥の国の恥になったことである。彼らにとって、焼身という死には、革命のためには存在をカタルシスする行為であると考えられる。

『銀河鉄道の夜』で、死の話題はいつも「みんなの幸せのために」という言葉と離れられない。さそりは自分の意志のまま、「どうか神さま。私の心をごらん下さい。」という願望を言い出した。おかげで、さそりは「彼の尾に螫されると死ぬ」の悪い虫からいい虫に変わる。要するに、それは悪から善に転換することである。これは「自己犠牲」の最上級であると見なされる。

2.4 ジョバンニの心理変化に反映された自己犠牲

ジョバンニは本作の主人公であり、宮沢賢治本人をモデルとして創作したキャラクターである。彼の父親が家を出ていつも不在で、母親が病に臥し、子供の頃から辛い生活を過ごしている。授業の時常にぼんやりして、放課後も活版所で働かなければいけない。ジョバンニの父は悪いことをして警察に逮捕されるという噂が町に流布し、彼は周囲の人に冷やかされている。あまりにも寂しすぎるから、ケンタウル祭の夜に黒い丘へ行って、自分の銀河鉄道の旅につく。銀河鉄道の上で、ジョバンニは唯一の友達カムパネルラと出会って、そこから二人の友情を継続する。カムパネルラもジョバンニが本当の幸福へ導いていく道しるべになる。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」（宮沢賢治, 1969: 35）。カムパネルラの疑問を信号として、彼は本当の幸せってなんだろうという問題を考え始めた。

そして、二人はボロボロなコートを着ている鳥捕りと遭遇した。鳥捕りは河原にたつて、鷺や雁などの鳥を捕まえ、食べ物として売る。ジョバンニたちにも鳥を差し出してくれた。いつも神出鬼没な人である。この鳥捕りを見て、ジョバンニはどうやら気の毒を感じて、彼の幸福を祈っている。

「もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つづ

けて立って鳥をとってやってもいいというような気がして、どうしてももう黙ってられなくなりました」(宮沢賢治, 1969: 54)。

次は青年教師一同と短い間の付き合い。青年の献身行為を聞いて、ジョバンニの認識も一歩進んで、少し昇華する——思考していた問題は幸福とはなんだろうから実際にどういう行動を取ったらいいかに変化した。

「ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう」(宮沢賢治, 1969: 68)。

途中でジョバンニたちは「蠍の火」を見、かおる子から蠍の火の伝説を聞き取った。あの伝説は『銀河鉄道の夜』の中でも重要な意義があり、ジョバンニの幸福観を変える肝心なきっかけであると思っている。「蠍の火」の話が終わったあと、ジョバンニの幸福観は「個人の幸福」という利己的な自己意識から、「みんなの幸福」という宇宙的意識に転換した。故に、彼は言う。

「僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない」(宮沢賢治, 1969: 102)。

そして、青年一同が鉄道から降りる前、ジョバンニは「天国」と「神」についてかおる子と一度ことばを交わす。

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上

へ行くところなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなっちゃっていいじゃないか。ほくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が云ったよ」(宮沢賢治, 1969: 97-98)。

死者にとって、心の帰る場所は真の天国しかないが、生者には現実を逃げて、ひたすらに死後の極楽浄土を求めるのはいけない。生きている人は人間天国の建設に自分の力を尽くすべきである。

3. 宮沢賢治の法華信仰と『銀河鉄道の夜』に現れた自己犠牲の関連

詩人や作者として、宮沢賢治の思想と実践性は多くの日本文学作者の中にも非常に注目されている。彼の意識世界で、法華経は極めて重要な位置を占めている。法華経の思想はもう賢治の思想の一部になり、法華経で提唱された自己犠牲の精神も宮沢賢治本人と彼の作品に深い影響を与えた。賢治の世界観は法華経を主体として仏教傾向の強い世界観になると思う。

3.1 宮沢賢治の法華信仰

宮沢賢治は、生まれてから病弱で、肺結核にかかって若死にした。まさに悲劇的な一生である。宮沢家は従来浄土真宗を信奉しているが、賢治は法華宗を信仰し父親の政次郎と対立する。賢治は全部の人生をかけて法華経を信仰し、創作した作品中で読者たちに救世済民を提唱する。法華経にも、自分を救うより他者を救うほうがましだという教義がある。宮沢賢治のしていることはまさに法華経の教義を具現化した、菩薩のような行為である。宮沢賢治の幸福観もその思想の具体的な表現であると思う。

宮沢賢治の作品『農民芸術概論』で言及された「われらは世界のまことの幸福を索ねよう」(宮沢賢治, 1997: 3)。賢治にしてみれば、「本当の幸福」は宇宙の意志に従い、あらゆるの生き物のために築いた終極の幸福、理想

の極楽浄土である。故に、彼はそういう理想を反映する作品をたくさん書いた。

賢治は最後の最後まで、法華文学の創作に取り組み、全ての力を尽くした。彼の文学は単純な宣教作品ではないが、法華経精神が全部反映された。賢治の作品は文学作品でありながらも、独特な宗教色彩が付いているので、法華文学とも呼ばれている。自分の作品を通して世間に自分の信仰を宣告し、自分の文字で大乘を発揚する宮沢賢治は現実の醜さを非難しながら、人間を善と幸福に辿る道に導いていく。

法華経から救いをもらった宮沢賢治は、求道者になった。彼の作品は一般人の自己意志に基づいて創作したものではなく、宇宙意志に従って創作したものである。法華経をもとにして書いた童話は必ず人間に本当の幸福を与えられると彼は信じている。

3.2 『銀河鉄道の夜』の自己犠牲と法華信仰

宮沢賢治は現実から離脱するために極楽浄土を求めるわけではない、今生きている世間で理想の天国を作りたいからである。主人公のジョバンニの言ったとおり「天上へなんか行かなくなっちゃいいじゃないか。ほくたちここで天上よりもっといいところをこさえなけあけないうって僕の先生が云ったよ」(宮沢賢治, 1969:98)。

法華経の中で、世の中全ての命は全部仏になれると強調する。つまり悪をした人でも、足を洗ったら死後仏になれるということ。そういう調和精神と寛容な態度は、蠨の火の伝説にも反映された。今まで多くの命を食べた蠨はみんなの幸福のために焼身を願い、夜の闇を照らしている。この物語にて、自己犠牲の行為はまさに最高級な救いであるとも言える。自らの身を捧げれば、いままで犯した罪も消せるという法華信仰の理念が童話を借りて読者に届く。

旅の最後、ジョバンニは学者さんにいう。「さあもうきっと僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」(宮沢賢治, 1969:117)。彼は「み

んなの本当の幸福」を探しに行く」と決意をした。成長したジョバンニは世界がどうやって変わるかとはもう望みたくない。彼は気づいた、世界が彼に期待している。この世のために彼は力をつくして寄与すべきである。果てない暗闇に光を貢献したさそりのように、自己犠牲して菩薩と同じ道を歩いていきたい。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう」（宮沢賢治, 1969 : 103）。

ジョバンニの言葉は宮沢賢治の決心が反映された——理想の天国を実現するには、たとえどんな辛えであろうと、彼はきっと何も怖らざまっすぐ進むのである。

おわりに

拙論は、『銀河鉄道の夜』における自己犠牲を三つの階段に分けて、カムパネルラの死、姉弟の家庭教師をしている青年の背景と蠅の火の物語をそれぞれ分析した。まず、カムパネルラは同級生のザネリを助けるために、川に飛び込んで犠牲された。彼の自己犠牲は無意識的な行動で、第一階段の「自己犠牲」に属すると思う。次は、青年教師の自己犠牲である。彼は神の指示に従って捨て生き残る機会を他者に譲ったが、これは自分の意志で選んだ行動ではないから、筆者はこれを第二階段の「自己犠牲」であると推測する。それから、ジョバンニたちは「蠅の火」の伝説を聞き取った。蠅は自分の体を燃えてよる夜を照らした。これは自分の意志で選択した結末なので、蠅の犠牲行為は最上級の「自己犠牲」であると判断する。また、旅の過程で少しずつ変化したジョバンニの心理に基づいて、作品中反映された自己犠牲をさらに分析する。最後は、宮沢賢治の法華信仰と関連し、賢治は自分の作品を通してみんなの本当の幸福を求める大志を表した。

『銀河鉄道の夜』に見られる自己犠牲を探究し、「理想の天国を実現するには、たとえどんな辛えであろうと、きつと何も怖らざまっすぐ進む。」という結論をだしたが、筆者の専門知識はまだ不足なので、触れない細部も多くあると思っている。宮沢賢治は筆者一番好きな作者なので、賢治に関する研究も続けたいのである。今後は、この方面の能力をもっとあげるよう精進していくと考えている。

参考文献

- 1) 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』角川書店、1969年。
- 2) 鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波書店、2001年。
- 3) 東光敬『銀河鉄道の夜をつくった宮沢賢治 宮沢賢治の生涯と作品』ゆまに書房、1998年。
- 4) 宮沢賢治『農民芸術概論』筑摩書房、1997年。
- 5) 畑山博『銀河鉄道 魂への旅』PHP研究所、1996年。
- 6) 宮沢賢治『よだかの星』偕成社、1987年。
- 7) 横山明弘「宮沢童話における構造的研究1:弱肉強食から自己犠牲へ」『筑波大学人文科教育研究』第16号、1989年、25-37頁。
- 8) 和田康友「宮沢賢治と自己犠牲」『法政大学日本文学誌要』第7号、1996年、50-58頁。
- 9) 秦野一宏「宮沢賢治における自己犠牲の問題:『グスコープドリの伝記』をめぐって」『海保大研究報告』第2号、2012年、1-30頁。
- 10) George Pullattu Abraham「宮沢賢治の作品に見られる「非暴力主義」「自己犠牲の精神」と「菜食主義」の一考察——インド人の観点から」『国際日本文化研究センター日本研究』第9号、2007年、67-93頁。
- 11) 田村均「自己犠牲の倫理的的分析」『名古屋大学文学部研究論集・哲学』第3号、1997年、37-64頁。
- 12) 川谷茂樹「エゴイズムと自己犠牲: ニーチェの利他主義批判の倫理的意義」『北海学園大学学園論集』第6号、2007年、1-23頁。
- 13) 田村均「自己犠牲をめぐる三つの物語—エウリピデス, ティム・オブライエン, 宮沢賢治」『名古屋大学文学部研究論集』第3号、1999年、37-72頁。

- 14) 王腊「对宫泽贤治通话中幸福观的考察」燕山大学、2016年。
15) 周异夫「法华文学与人间天堂」『日语学习与研究』第2号、2003年、68-70頁。

日本語の接尾辞「～的」と 中国語訳の「～的」との対応性について

惠州学院外国語学院2018年度卒業生 蔡景泉

■指導教員 蒋新桃 康伝金

講評

言語学習者にとっては、多義性と曖昧性を持っている表現は難しい。特に母語に似ているところが多い言語である。「的」はそういう代表的な語と言える。この論文の研究によると、対応する中国語訳「的」のある日本語の「的」の語基の特徴としては、多くは二字漢語と名詞、サ変可能の動詞である。一方、対応しない場合の語基は主に一字漢語、日本語用語のぼかし表現に傾くことである。最後、対応する中国語訳「的」のある非「的」形容動詞の場合も少なくはない。そういう場合、語基は主な形容動詞で、「評価」、「様子」、「程度」、「状態」を表すものである。以上の分析を通し、学習者に「的」の学習方法を提出する。

はじめに

問題提出

「わたし的には」という表現が2000年に新語・流行語に選ばれたので、「～的」という言葉は現代日本語で大切な役割を果たしていることが分かる。今になっても、「～的」は多量に使用されている。しかし、「～的」の

多義性と曖昧性は日本語学習者にとって難しい。特に中国人である。なぜかというと、中国語では「的 de」が助詞として、修飾語と中心語の中に置かれ、修飾関係と所属関係を表す。日本語の接尾辞「～的」に比べ、似ているところがありながら、違うところもあるのである。そのため、中国人日本語学習者と日本人中国語学習者にとっては間違いやすい表現である。それでは、両言語の「～的」の対応性は一体どういうことか。

先行研究及びその問題点。

「～的」に関する先行研究はたくさんある。各方面から「～的」を分析していた。例えば、南雲（1994）は、雑誌『中央公論』1992年11月号にある「～的」を抽出し、整理していた。「～的」の語種、表記、語基の意味などが専門分野によって違うことを明らかにした。根岸（2007）は、社説の「～的」のデータに基づいて、乱用されている現象は時代の推移とともにどんな変化があるのかを明らかにしている。しかし、接尾辞「～的」の日中比較に関する先行研究が少ないようである

本研究の位置づけ及び研究方法

本稿はネット上の多機能辞典ウィクショナリー（Wiktionary）での形容動詞一覧に基づいて、「～的」付き形容動詞と二字漢字の非「～的」形容動詞100語を抽出し、日本語と中国語訳を比較したい。第1章では、「～的」の語源と基本意味用法をまとめ、現代日本語における「～的」の使用実態を分析する。第2章では、語種、品詞、意味分野から対応する中国語訳のある「～的」の語基特徴を分析する。第3章では、語種、日本用学習慣から対応する中国語訳のない「～的」の語基特徴を分析する。第4章では、語種、意味分野から対応する中国語訳のある非「～的」形容動詞の語基特徴を分析する。最後は、日本語と中国語の「～的」の対応性と不对応性の原因をまとめる。日本語教育と中国語教育に対して自分なりの指導方法を提出してみたい。

1. 「～的」の起源と現代の濫用

1.1 「～的」の起源

「～的」の起源に関する説はたくさんある。山田（1961:56-61）の「発生期における的ということば」によると、最初の「～的」の使用方法は現代日本語の「～的」の使い方と違う。明治十年前後は中国の白話小説が流行していた。そこからの「的 de」を使っていた。または、人名の一部に「～的」をつけて使っていた。明治十年ごろ西周、中村正直などの学者層によって翻訳文などの硬い文章の中で使用始めた。それは現代日本語の「～的」である。現代日本語の「～的」が中国語の「～的」と異なるところが多いが、山田（1961:56-61）の説によると、中国語の「～的」は昔から日本語の「～的」と深いつながりがあるそうである。それだからこそ、似ているところが少なくはないのである。

「～的」の意味としては、多数の先行研究は多義性と曖昧性だと指摘する。しかし、「～的」の大体の意味は望月（2010:1-12）のまとめのようにである。望月（2010:1-12）のまとめによると、「～的」の意味用法は3種類に分類できる。第一種類では、「A 的 B」の意味は、「B が A の性質を有している」「B が A（の / する）状態である」、「A のような B」、「A における B」「A としての B」「A についての B」「A に対する B」である。第二種類では、「～的」の用法は連体用法、連用用法、断定用法とその他がある。連体用法は、直接体言を修飾する「～的」（直接連体用法）、体言を修飾する「～的な」、体言を修飾する「～的の」、三つからなっている。連用用法は、直接に用言を修飾する単独の「～的」、用言を修飾する「～的に」、用言を修飾する「～的と」、「～的には」「～的とも」四つからなっている。断定用法は、後続としての断定の「だ」「だった」など、後続としての「で」「である」「でない」などからなっている。第三種類は辞書の記載に基づいて一時的な用法と固定の用法に分類する。

1.2 「～的」の現代の誤用

前言ったように、「～的」は多義性と曖昧性がある表現であり、使用できる範囲がひろい。そのため、今になっても、「～的」が大量に使用されている。しかし、「～的」が乱用されている現象はよくあるようである。大山（2001:71-81）は、「～的+名詞」、「～的な」、「～的に」、「～的には」の誤用をまとめた。

「～的+名詞」の場合は、「的」を取った方が良い用例、「的」を「の」に言い換えた方が良い用例、「的」が必要な用例の三つがある。「的」を取った方が良い用例としては、「政治的責任」を取り上げた。報道で、「今後の政治的責任が問われる」とよく使われる。しかし、話し手が「…のよう」と考えているのは普通思われない。こういう場合は、「政治的責任」よりは「政治責任」の方が明確で理解しやすい。「文化的遺産」もそうである。

「的」を「の」に言い換えた方が良い用例としては、「社会的ニュースの例」を取り上げた。社会的ニュースとは社会からのニュース、つまり社会のニュースであることを指摘する。「経済的負担」、「公共的機能」、「組織的抵抗」もそうである。「的」が必要な用例としては、「具体+的+行動」のように分解できない場合は「具体的+行動」の方が良いことがある。

そして、「～的な」は、「的な」を取った方が良い用例、「的な」を「の」や他の語に言い換えた方が良い例、「的な」が必要な用例等同じく三つの場合がある。「的な」を取った方が良い用例としては、「国際的な政治」の例がある。大山（2001:75）によると、「～的な」は「～的+名詞」の派生した使用例と考えられるので、「的」を抜いても内容上が問題なしである。つまり、「国際的政治」＝「国際的な政治」＝「国際政治」である。

「的な」を「の」や他の語に言い換えた方が良い例としては、「国民的な合意」などの例である。国民のような人たちの合意ではなく、これはまさに国民の合意である。そして、「安定的な資金確保」より「安定した資金確保」の方が明確である。または、「名目的な結婚」より「名目上の結婚」の方が理解しやすい。話し手が言葉の明晰さに配慮するべきだと大山（2001:75）が強調する。「的な」が必要な用例は、「～的+名詞」のよう

に「～的な」を「～+的な」と分解できない場合である。

最後、「～的に」の場合も「～的+名詞」「～的な」と同様に「的に」を取った方が良い用例、「的に」を他の語に言い換えた方が良い用例、「的に」が必要な用例と三つの場合がある。「的に」を取った方が良い用例は、ほとんどない。「的に」を他の語に言い換えた方が良い用例では、「的に」は「…にしたがう」の意味で使用されることが多い。したがって、「的に」を他の表現に言い換える例が多数存在している。「的に」が必要な用例では、「～的+名詞」「～的な」表現の場合と同様に「～的に」を「～+的に」と分解できない場合である。

2. 「～的」が中国語訳「～的」に対応する語基特徴

ウィクシヨナリーの定義によると、

ウィクシヨナリーは辞書であり、その辞書を作成するプロジェクトです。ウィクシヨナリーは、いくつかの点においてユニークな辞書です。(ウィクシヨナリーの定義)

ウィクシヨナリーでの形容動詞一覧に基づいて、「～的」付き形容動詞と中国語訳表を以下のようにまとめる(表1)。使い方と訳語を辞書で引いた。

ウィクシヨナリーでの形容動詞一覧での「～的」付き形容動詞が130語ある。書き換える単語が4語あるので、本稿で126語を取り上げた。一覧表(1)によると、完全に対応するのではない語は11語ある。残りの115語は対応する中国語訳「～的」が付く語である。

2.1 語基の語種が主に二字漢語であること

一覧表(1)では、中国語訳は「～的」が付く語は115語ある。「～的」付き形容動詞の約91.2%を占める。大切な役割を果たしている。どうして

表1：「～的」付き形容動詞と中国語訳

「～的」付き 形容動詞 (述語または体言 修飾語として)	対応の中国語訳	「～的」付き 形容動詞 (述語または体言 修飾語として)	対応の中国語訳
一時的	一时的	合理的	合理的
一般的	一般的	國際的	国际的
意図的	有目的的	個人的	个人的
永続的	永久性的	國家的	国家的
懷疑的	怀疑性的	古典的	古典的
開放的	开朗的；开放的	根本的	根本的
画一的	划一的	最終的	最终的
画時代的	划时代的	刺激的	刺激性的
革新的	革新性的	自主的	自主的
革命的	革命性的	歴史的	历史性的
画期的	划时代的	思想的	思想的
過渡的	过度性的	実用的	实用的
感覺的	感觉性的	史的	关于历史▲
感情的	感情的	私的	私人性▲
感傷的	令人伤感的	自発的	自发的
間接的	间接的	社会的	社会的
感動的	令人感动的	社交的	社交的
觀念的	观念性的	宗教的	宗教的
技術的	技术的	主觀的	主观的
記述的	记述的	宿命的	宿命的
機能的	实用的	主導的	主导的
規範的	规范性的	守備的	防备的
基本的	基本的	消極的	消极的
義務的	义务性的	初歩的	初步的
客觀的	客观的	自律的	自律性的
急進的	激进的	自立的	自立的
求心の	向心の	人為的	人为的
強圧的	高压的	人工的	人工的
驚異的	惊人的	人道的	人道的
享樂的	享乐的	進歩的	进取的

近視眼的	缺乏眼见▲	心理的	心理的
近代的	近代的	政治的	政治的
具体的	具体的	精神的	精神的
経済的	经济的	靜的	静态性▲
形式的	形式上的	積極的	积极的
劇的	戏剧性▲	絶対的	绝对的
決定的	决定性的	前衛的	前卫的
現代的	现代的	漸進的	渐进的
高压的	高压的	専門的	专业的
攻撃的	攻击性的	総合的	综合的
好戰的	好战的	相對的	相对的
公的	公共的▲	断続的	断断续续的
後天的	后天的	抽象的	抽象的
合法的	合法的	挑発的	挑逗性的▲
効率的	效率性的	直接的	直接的
直線の	直线的	通俗的	通俗的
伝統的	传统的	道義的	道义上的
動的	具有动感▲	道德的	道德的
独占的	独占的	独善的	自以为是▲
独創的	独创的	独立的	独立的
内向的	内向的	人間の	有人情味的
熱狂的	狂热的	能率的	有效率的
排他的	排他的	反抗的	反抗性的
反動的	反动性的	反論理的	反逻辑性的
悲觀的	悲观的	非人道的	非人道的
非人間の	没有人情味的	非論理的	不合逻辑的
部分的	部分的	不飽和的	不饱和的
閉鎖的	封闭性▲	平和的	和平的
法的	法律上▲	保守的	保守的
本質的	本质的	模範的	模范的
野性的	野性性质的	友好的	友好的
樂觀的	乐观的	理想的	理想的
理知的	有理智的	論理的	合乎逻辑的

▲：完全に対応するのではない

絶対の9割を占めるのか、どうして対応する中国語訳「～的」が付くのか。続いては原因を探してみたい。

「～的」の語基の特徴を分析するには、115語を語種によって以下のように並べた。

二字漢語：一時的、画一的、画期的、一般的、意図的、合理的、国際的など……109語

三字漢語：画時代的、非人間的、反論理的、非人道的、非論理的、不飽和的、……6語

語基を見ると、二字漢語「～的」付き形容動詞が全体の約94.7%を占めることが分かる。三字漢語が5.2%となっている。「～的」付き形容動詞のほとんどは「漢語+的」であることも分かり、特に「二字漢語+的」である。そのため、対応する中国語の言い方があり、中国語訳「～的」が付きやすいと推測できる。

2.2 語基が主に名詞、サ変可能であること

以上の109語の二字漢語を語基の品詞によって、以下のように並べる。

名詞：一時的、画一的、画期的、一般的、合理的、国際的、個人的、革命的、感覺的、感情的、感傷的、間接的、技術的、規範的、基本的、義務的、客観的、求心的、驚異的、近代的、具体的、形式的、現代的、高圧的、好戦的、後天的、効率的、直線的、国家的、古典的、根本的、最終的、自主的、思想的、自発的、社会的、社交的、宗教的、宿命的、主観的、消極的、初歩的、人為的、人工的、人道的、心理的、政治的、精神的、積極的、前衛的、専門的、相対的、伝統的、内向的、排他的、反動的、部分的、本質的、野性的、理知的、歴史的、道義的、独善的、人間的、能率的、模範的、友好的、理想的、論理的……69語

名詞、他動詞、サ変：意図的、開放的、革新的、記述的、強圧的、享樂的、決定的、攻撃的、刺激的、実用的、主導的、守備的、総合的、抽象的、独占的、独創的、楽観的、保守的……18語

名詞、自動詞、サ変：永続的、懷疑的、過渡的、感動的、機能的、急進

的、自律的、自立的、進歩的、漸進的、断続的、熱狂的、独立的、反抗的……14 語

名詞、自他動詞、サ変：観念的、悲観的……2 語

名詞、形容動詞：経済的、合法的、通俗的、平和的……4 語

名詞、副詞：絶対的……1 語

名詞、副詞、形容動詞：直接的……1 語

名詞のみの語基が 69 語で、全体 109 語の 63.3% を占める。次は名詞、他動詞、サ変は 16.5% で、三位は名詞、自動詞、サ変で 12.8% を占める。全部の語基は名詞の品詞がある。それによると、「的」付き形容動詞の語基は名詞であること。また、サ変可能の語基も多い。

残りの三字漢語は全部一字漢語＋二字漢語の形である。

画時代的：画＋時代……時代は名詞である。

非人間的：非＋人間……非は打ち消しの接頭辞で、人間は名詞である。

反論理的：反＋論理……反は否定を表す接頭辞で、論理は名詞である。

非人道的：非＋人道……非は打ち消しの接頭辞で、人道は名詞である。

非論理的：非＋論理……非は打ち消しの接頭辞で、論理は名詞である。

不飽和的：不＋飽和……不は打ち消しの接頭辞で、飽和は名詞、自動詞、サ変である。

「非」、「反」、「不」とも接頭辞である。「一字漢語＋二字漢語」の場合は、ほとんどは「接頭辞＋名詞」だとわかる。「画」のみが時代を創造する意味の動詞である。中国語も「一字漢語＋二字漢語」の形が多い。これは学習者にとっての難点である。

2.3 語基の語基が主に「変化」「関係」「支配」「感覚」などを表すもの

王娟（2008:79）では、「～的」付き形容動詞はほとんど「変化」「関係」「支配」「感覚」の意味分野を表す。ほかには、「意味」「問題」「趣旨」の意味分野である。上述の 115 語を王娟の観点によって分類してみる。

「変化」：一時的、永続的、革新的、革命的、過渡的、急進的、進歩的、漸進的、断続的……9 語

「關係」: 合理的、一般的、國際的、個人的、國家的、自主的、自發的、間接的、社会的、主觀的、客觀的、形式的、相對的、後天的、合法的、直接的、直線的、独占的、排他的、反抗的、反動的、部分的、不飽和的、平和の……24 語

「支配」: 意図的、根本的、画一の、画時代の、歴史的、画期的、主導的、自律的、自立的、人為的、人工的、近代の、絶対的、決定的、現代の、専門的、総合的、独創的、独立的、人間の、非人間の、本質的、野性的……23 語

「感覺」: 懷疑的、古典的、開放的、刺激的、実用的、感覺的、感情的、感傷的、感動的、消極的、強圧的、驚異的、享樂的、積極的、高圧的、好戰的、内向的、熱狂的、悲觀的、保守的、友好的、樂觀的、理知的……23 語

「意味」: 宿命的、義務的、求心的、人道的、前衛的、非人道的……6 語

「問題」: 技術的、機能的、攻撃的、効率的、道義的、道德的、能率的、反論理的、非論理的、論理的……10 語

「趣旨」: 記述的、基本的、政治的、具体的、經濟的、抽象的、通俗的、伝統的、理想的……9 語

その他: 最終的、思想的、社交的、宗教的、觀念的、規範的、守備的、初歩的、心理的、精神的、模範的……11 語

上述の分類は王娟の観点を証明した。

3. 「～的」が中国語訳「～的」に対応しない語基特徴

3.1 語基の語種が主に一字漢語であるもの

表(1)を見ると、日本語の「的」が完全に中国語訳に対応しない11語を漢字数によって、以下のように並べた。

一字漢語: 史的、私的、靜的、劇的、公的、動的、法的……7 語

二字漢字: 挑発的、独善的、閉鎖的……3 語

三字漢語: 近視眼的……1 語

一字漢語は全体 11 語の 63.6% を占める。つづいては二字漢字 27.2% で、最後は三字漢字 9.0% である。中国語訳に対応しない 11 語の語基は主に一字漢語だとわかる。この 11 語の中国語訳の「的」が付くが、完全に合っているのではないわけである。なぜかというと、中国の一字漢字の語には半自由語素が少なくはない。それらが単独語彙としてはならないので、もう一つの一字漢字と結合しなくてはならないわけである。例えば、日本語の「私的」は中国語の“私人性”に対応する。また、「挑発的」、「独善的」、「閉鎖的」、「近視眼的」の言い方が中国語ちょっと異なる。これは両言語の用語習慣が違うと思われる。

3.2 語基が日本用語の曖昧性に傾くもの

表 (1) に載っていない中国語訳の「的」に完全に対応しない「的」付き形容動詞はほかにたくさんある。ここでは、最近流行している「わたした的には」を挙げて分析してみたい。明鏡国語辞典では：

○○的

「私的には OK です」

「気持ち的にはイマイチです」

■てき【的】〔接尾〕

【語法】近年、「～の上では」「～としては」などの意で、和語に付いて「気持ち的（仕事の、味（あじ）的）には」、代名詞に付いて「わたしたち的（僕の）には」、また形容動詞語幹に付いて「マニアック的・有効的」などと使われるが、標準的でない。（明鏡国語辞典）

「わたした的には」、「気持ち的には」ともほかし表現である。直接自分の主張を言わずに、逃げ道を探す。言葉を曖昧にするのは日本人の用語習慣だと思う。ネット上の転職サイト Tap-biz のビジネスマナーによると：

「私的には」は「私としては」の意味になります。単純にそれだけの意味ではなくニュアンスも知っておきましょう。若者に多く見られ

る「ほかし言葉」に「～みたいな」「～の方」「～とか」という曖昧な表現があります。

物事を断定しないで、相手との関係を平和に保とうします。「私的には」も「私」の立場を主張しながらも、どこかほかして曖昧にしている状態です。相手にちゃんと伝わらない恐れもあります。(Tap-bizのビジネスマナー)

最近、「わたし的には」という表現は若者のあいだではやっているようである。Tap-bizのビジネスマナーは、そういうほかし表現は相手に謙遜の態度を見せされりながらも、話し手の意見などは相手に十分に伝えられない恐れも存在していることを指摘する。特に職場の場合では使わない方が良い。

4. 非「～的」形容動詞が中国語訳「～的」に対応する語基特徴

4.1 語基が形容動詞であること

遠藤(1984:136)は「名詞につけ加えて形容動詞を作るのが接尾語「的」の役割であるから、もともと形容動詞であるものに「的」をつける必要はない。」を指摘する。したがって、以下は遠藤の観点を検証してみたい。

表2によって語基を品詞で分類すると、以下のようにならべる。

形容動詞：曖昧、富強、健全、狡猾、巧妙、繁忙、柔順、新鮮、盛大、精美、熱烈、微妙、美妙……13語

名詞、自動詞、サ変：安心、安全……2語

名詞、形容動詞：安静、意外、異常、偉大、円滑、遠大、温暖、簡易、頑強、簡単、簡明、簡便、不正、奇怪、危険、奇特、貴重、機敏、強健、敏感、強大、美味、悲痛、巨大、軽快、軽便、健康、幼稚、幸運、光栄、高遠、高雅、豪華、幸福、公平、傲慢、孤独、固有、困難、残酷、寂靜、重大、周密、重要、主要、純粹、正直、上等、新奇、深厚、深刻、親密、正確、精確、誠実、正当、精密、壯觀、薄弱、壯烈、大胆、大量、単純、

表2：中国語訳「～的」に対応する非「～的」形容動詞100二字漢語表

非「～的」 形容動詞 (述語または 体言修飾 語として)	中国 語訳	非「～的」 形容形容 動詞 (述語または 体言修飾 語として)	中国 語訳	非「～的」 形容形容 動詞 (述語または 体言修飾 語として)	中国 語訳	非「～的」 形容形容 動詞 (述語または 体言修飾 語として)	中国 語訳
曖昧	曖昧的	安心	安心的	安靜	安静的	安全	安全的
意外	意外的	異常	异常的	偉大	伟大的	円滑	圆滑的
遠大	远大的	温暖	温暖的	簡易	简易的	頑強	顽强的
不正	不正的	簡單	简单的	簡便	简便的	簡明	简明的
奇怪	奇怪的	危險	危险的	貴重	贵重的	奇特	奇特的
機敏	机敏的	富強	富强的	強健	强健的	敏感	敏感的
強大	强大的	美味	美味的	悲痛	悲痛的	巨大	巨大的
輕便	轻便的	輕快	轻快的	健康	健康的	健全	健全的
謙遜	谦逊的	幼稚	幼稚的	幸運	幸运的	光榮	光荣的
高遠	高远的	高雅	高雅的	豪華	豪华的	狡猾	狡猾的
幸福	幸福的	公平	公平的	傲慢	傲慢的	巧妙	巧妙的
孤独	孤独的	固有	固有的	困難	困难的	繁忙	繁忙的
殘酷	残酷的	寂靜	寂静的	柔順	温顺的	重大	重大的
周密	周密的	重要	重要的	主要	主要的	純粹	纯粹的
正直	正直的	上等	上等的	新奇	新奇的	深厚	深厚的
深刻	深刻的	新鮮	新鲜的	親密	亲密的	正確	正确的
精確	精确的	誠實	诚实的	盛大	盛大的	正当	正当的
精美	精美的	精密	精密的	壯觀	壮观的	薄弱	薄弱的
壯烈	壮烈的	大胆	大胆的	大量	大量的	單純	单纯的
單調	单调的	淡泊	淡泊的	知名	知名的	忠實	忠实的
軟弱	软弱的	良好	良好的	同等	同等的	透明	透明的
同様	同样的	独特	独特的	端正	端正的	特殊	特殊的
任意	任意的	熱心	热心的	熱烈	热烈的	莫大	莫大的
爽快	爽快的	悲慘	悲惨的	微小	微小的	微妙	微妙的
美妙	美妙的	平等	平等的	粗暴	粗暴的	不安	不安的

単調、淡泊、知名、忠実、軟弱、良好、同等、透明、同様、独特、端正、特殊、任意、熱心、莫大、微小、悲惨、平等、粗暴、不安、爽快……84語

名詞、形容動詞、自動詞、サ変：謙遜……1語

以上の分類を見ると、形容動詞という品詞を含まない語ただ2語である。形容動詞という品詞を含む語は98語で、全体の98%を占める。遠藤の言っていることに合っている。対応する中国語訳「的」があるが、そういう形容動詞は「的」をつけずに、そのまま、または「な」、「に」をつけて修飾語を修飾する

4.2 語基の意味分野が大体「評価」、「様子」、「程度」、「状態」を表すもの

王娟（2008:79）は、「一步、非「的」ナ形容詞の中で高比率を占める意味分野の語基は、「感覚」、「性格」、「状態」、「数量」の4項目で37.9%に及び、その他に「快」、「驚き」、「喜び」などが含まれるとしている。」と指摘する。つづいては、以上の100語を王娟の方法をまねし、weblio辞書における品詞分類での名詞及び形容動詞によって以下のように整理してみる。

「世間」：知名……1語

「性格」：正直、柔順、薄弱、誠実、健康、深厚、狡猾、頑強、熱心……9語

「心情」：幸福、幸運、安心、悲痛、不安……5語

「態度」：大胆、軽便、傲慢……3語

「外見」：巨大……1語

「魅力」：豪華、美妙、美味、精美、高雅……5語

「様子」：単純、単調、端正、異常、孤独、奇怪、壮烈、幼稚、簡便、爽快、曖昧、健全、新鮮、奇特……14語

「評価」：公平、精密、精確、忠実、巧妙、富強、上等、軟弱、壯観、偉大、遠大、不正、貴重、機敏、軽快、光榮、純粹、深刻、淡泊、謙遜……20語

「程度」：大量、簡明、熱烈、敏感、微妙、微小、強健、強大、盛大、高遠、簡易、簡単、莫大……13語

「関係」：同様、同等、親密、任意、平等……5語

「思量」：意外……1 語

「状態」：安静、困難、周密、危険、円滑、繁忙、良好、悲惨、安全、固有、寂靜、透明……12 語

「事柄」：正当、新奇、主要、重要、正確、重大、独特、特殊…… 8 語

「醜惡」：残酷、粗暴…… 2 語

「自然」：温暖…… 1 語

一位は「評価」を表す語で、全体の 20% を占める。二位は「様子」を表す語で、14% である。三位は「程度」を表す語で、13% である。四位は「状態」を表す語で、全体の 12% を占める。

おわりに

以上の分析を見ると、日本語の「的」の対応する中国語訳「的」がある場合とない場合もある。そのため、日本語学習者と中国語学習者にとっては理しにくい点である。本研究をまとめると、対応する中国語訳「的」のある語の語基がだいたい二字漢語で、品詞が主な名詞、サ変可能である、対応する中国語訳「的」のない語の語基がほとんど一字漢語で、語基用語が日本語の曖昧性に傾くことは特徴である。非「的」二字漢字形容動詞の対応する中国語訳「的」がある場合では、語基は主な形容動詞で、意味分野はだいたい「評価」、「様子」、「程度」、「状態」を表すことである。どうして対応する中国語訳「的」のある語の語基が多数サ変動詞か、それを掲示する先行研究がまだないようである。したがって、それを今後の課題として研究してみたい。

参考文献

- 1) 遠藤織枝「接尾辞『的』の意味と用法」『日本語教育』第53号、1984年、125-138頁。

- 2) 南雲千歌「現代日本語の「～的」について－雑誌『中央公論』1992年11月号の場合－」『ICU日本語教育センター紀要』第3号、国際基督教大学日本語教育センター、1994年。
- 3) 藤居信雄「的という言葉」『言語生活』第71号、筑摩書房、1957年。
- 4) 藤居信雄「的の意味」『言語生活』第119号、筑摩書房、1961年。
- 5) 丸山千歌「英語の接尾辞-ticの訳語「的」について」『中央公論』1962年11月号、1996年。
- 6) 大山西一郎・上坂香織・小菅綾子「「～的」表現の分析」『高岡法科大学紀要』第12号、2001年、64-83頁。
- 7) 堀田和吉「助辞「～的」の受容 山辺道」第36号、1992年、59-76頁。
- 8) 根岸帆和「接尾辞『的』の用法の時代推移について」『日本文学文化』、東洋大学日本文学文化学会、2007年、25-35頁。
- 9) 朱緒芹日本語の「見る」と中国の「看」の意味拡張メカニズムについて [D] 山东大学、2007年。
- 10) 王娟「『的』付きナ形容詞の統語機能に関して」『ニダバ』第37号、西日本下言語学会、2008年、125 - 134頁。
- 11) 山田巖「発生期における的ということば」『言語生活』第120号、筑摩書房、1961年。
- 12) 望月通子「接尾辞「～的」の使用と日本語教育への示唆－日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて」『関西大学外国語学部紀要』第2号、2010年、1-12頁。

太宰治の『惜別』における「魯迅」について

惠州学院外国語学院2018年度卒業生 林 綺琪

■指導教員 李 楽 康 伝金

講評

太宰治の『惜別』という作品は、日本留学時代の魯迅を主人公として、太平洋戦争末期に国の依頼を受けて執筆された小説である。小説は当時の魯迅の親友である老医師で、担任教授である藤野先生との交流回想という設定で語られている。小説に、太宰治らしい豊富なイメージで日本仙台医専在学の

「魯迅」像が創られた。「魯迅」像は太宰治の個人的な創作であり、中国の魯迅像とギャップ感がある。この論文は『惜別』における創作背景、動機目的を結び合わせて、中国の魯迅像とギャップ感があるところを指摘して、そのギャップ感の形成原因を探究する。また、日本文学界の「魯迅」像の評論をめぐって、「魯迅」像へのマイナス評価とプラス評価を討論する。

はじめに

太平洋戦争末期に、内閣情報局と日本文学報国会は「大東亜共同宣言」の小説化を図り、そのため、太宰治は『惜別』の執筆を提出した。執筆目的からして『惜別』は明らかに当局の意向に迎合する国策小説と言われ、人々は作品自身が戦争に便乗すると非難する。

太宰治は魯迅留学当時の事実関係に基づき、魯迅の文章を自分の見解で飲み込んで、太宰治らしい豊富なイメージで「魯迅」像が創られた。しかし、小説の「魯迅」像は中国における魯迅像とギャップ感があると思う。なぜなら、小説に描き出した「魯迅」の性格と思想は、太宰治が魯迅作品に自己見解で解釈していることである。『惜別』を読む時、一般の中国人として魯迅のイメージと比べて、小説の「魯迅」像は少し微妙感を感じさせる。そこで、本論文は小説と事実のギャップ感をめぐって「魯迅」像の性格と思想から分析する。

中国における魯迅とギャップ感が生じたため、『惜別』の「魯迅」像に対して、日本の文学界では圧倒的に批判である。日本で魯迅研究の第一人者と呼ばれる竹内好(2005:194)は太宰治の魯迅の理解は浅いと指摘して、作者の自画像であると批判した。日本で一番有名な魯迅研究の専門家である藤井省三(2002:64)は、前のマイナス評価と反対に、『惜別』は青年魯迅の留学生活を描き出した青春物語であると意外的に、プラス評価を与えた。

本論文は『惜別』「魯迅」像について研究を展開して、主に魯迅本人とギャップ感があるところで、小説の「魯迅」像を分析する。また、「魯迅」

像をめぐって評論界の評論を参考して、『惜別』の「魯迅」像について自分見解で討論する。

1. 『惜別』の創作背景と動機

『惜別』は戦争時期に日本文学報国会の要請で執筆された作品である。創作時期の特殊性で、作品が政治目的の存在は避けられない事実である。しかし、『惜別』はただの国策小説とは言えない。小説の創作動機は大体文学報国会の要請と太宰治の創作欲望という二つに分けている。『惜別』における「魯迅」像を研究する前に、小説の複雑な創作背景と多重性がある創作動機をはっきりさせなければならないと思う。『惜別』で、太宰治は戦争の影響を受けて、「魯迅」像を通して自分の戦争観を述べているとも言える。また、「魯迅」像を創るために、太宰治は執筆前の魯迅資料を採集し、仙台へ当地の取材もした。そこで、創作背景と動機は、太宰治の「魯迅」像の描き出しに深い影響がある。

1.1 『惜別』の執筆背景

昭和16年12月に太平洋戦争を勃発してから、日本軍の戦況が悪化しつつある。昭和18年11月5、6日の両日にわたって、日本は日本軍政にある国々の代表を集め、帝国議事堂で大東亜会議が開催された。大東亜会議において「大東亜共同宣言」が採決された。「大東亜共同宣言」というのは「共存共栄」、「独立親和」、「文化昂揚」、「繁栄増進」、「世界進運貢献」を主題とする宣言である。日本文学報国会はこの宣言の五原則を文学作品とする計画で、太宰治を執筆希望者として協議会を開いた。同年2月、太宰治は『惜別』を執筆して提出した。彼は『魯迅伝』『大魯迅全集』『東亜文化圏』などを入手し『惜別』執筆の準備を進め、12月20日、当時の仙台医専在学魯迅のことを調査するため、仙台に行った。12月25日に帰宅してから、早々書き始め、翌年2月末に『惜別』237枚は完成した。太平洋戦争終戦直後の昭和の20年9月5日に朝日新聞社から『惜別』は刊行

された。

まぎれもなく、『惜別』の執筆時期は戦争中であり、刊行は戦敗後である。このような戦争時代で、日本文学は、軍部を中心とするいわば熱狂的な愛国風潮に圧迫されている。当時の文芸雑誌は次々廃刊されて、国策雑誌に統合される。太宰治の創作活動もその風潮の大きな影響を受けられたのである。戦争の時代背景で、太宰治は『惜別』の「魯迅」像を通して、日中平和を提唱し、日本国体へ高度賛美を与え、日本が戦争に必勝という観点を示している。

また、魯迅の文章は「魯迅」の形成に重大な影響がある。太宰治と魯迅はほぼ同時期の作家だが、実際に会ったことはなかった。太宰治の魯迅に対する印象は、大体魯迅の文章からしか得られない。そこで、『惜別』執筆の準備に「魯迅伝」「大魯迅全集」「東亜文化圏」などを入手した。藤井省三(2005:183)は「太宰はけっして『魯迅文章を無視』したり、『魯迅』像を『主観だけででってち上げ』てはならず、丁寧に全7巻の『大魯迅全集』を読み通し、魯迅の文章に則って『惜別』を書いている」と言っている。小説の本文さえ、魯迅の文章から直接の引用が用いられる。『惜別』の「魯迅」が自分の人生経歴を振り返るところの描写は、ほとんど魯迅の小説集である「朝花夕拾」のダイジェストである。つまり、『惜別』の「魯迅」は魯迅作品に基づいて創り出されたのである。

1.2 『惜別』の執筆動機

『惜別』の執筆動機は戦時下の文学報国会の要請と太宰自分の創作欲望という二つである。執筆時期によると、『惜別』は大東亜会議の五大宣言を小説化するため内閣情報局と文学報国会の要請で、つまり国の依頼を受けて書いた小説である。新潮文学「『惜別』の解説」には「いわば太宰治にとって、当局の要請に答えて書いた唯一の国策小説である」(奥野健男, 1973:307)とある。太宰治『惜別』の後書きにも「この『惜別』は、内閣情報と文学報国会との依頼で書きすすめた小説である」と書いてあり、確かに政治目的を図っているが、「しかし、両者からの話がなくても、私

はいつかは書いてみたいと思って、その材料を集め、その構想を久しく案じていた小説である」(太宰治, 1956: 368)とも書いてあり、太宰本人の意思で創られた作品でもある。文学報国会の要請には違いないが、中国の革命家をモデルとして描いたのは、当局の意図と違うと思う。それは太宰治自身が魯迅に対して、興味を持っていたことを示す。それは奥野健男(1973: 307)の「解説」に書いてあるように「プーシキン、チャーホフが好きな太宰は、中国の先駆的文学者であり、知識人の孤独、自意識を秘めた含羞の文学者である魯迅に特別の親近感を抱いていた」。また、魯迅は中国の革命家として、不幸の戦争時代に生まれ、日中平和を望んでいる。日中お互いに理解し、和平の願望は太宰治が訴えたいことである。

2. 『惜別』における「魯迅」について

中国語もわからず、中国へ行ったこともなかった太宰治は『惜別』の創作で仙台へ向かって当地調査をして、大量の魯迅の作品も入手した。ようするに、『惜別』の「魯迅」像は魯迅の文章を手本としているとも言える。言い換えれば、「魯迅」像の形成は、太宰治が魯迅の文章を自分の見解で飲み込んで、太宰治らしい豊富なイメージで創られたのである。しかし、小説の「魯迅」像は中国における魯迅像とギャップ感があると思う。ギャップ感というのは、小説の「魯迅」は音痴で旅行嫌いであり、日本のことを非常に気にかけているということである。また、魯迅の文学救国への転換の原因も小説では太宰自身の見解で解釈している。

2.1 音痴の「魯迅」

『惜別』によると「魯迅」は音痴である。「私」は記者であり、名勝松島で魯迅が歌う「雲の歌」が偶然耳に入ったことがある。それに対して「私」は「調子はづれと言はうか、何とか言はうか、実になんとも下手くそなのである」と(太宰治, 1983: 187)感想を持っている。魯迅の芸術力というと、彼は子供時代から美術に非常に趣味を持つ、大人になっても

美術教育を担当し、母校の校章をデザインし、美術書籍を翻訳するなどいろいろ美術関係の活動に参加している。それに関して、魯迅研究第一人者である藤井省三（2002：187）は「魯迅は幼少から美術に深い関心を寄せており、東京時代に計画した文芸誌『新生』表紙にはイギリスの画家G・F・ワッツの『希望』を用いようとしたし、辛亥革命の新生中華民国の教育部では美術教育を担当、北京大学の校章を自らデザインし、歴代の画冊や墓碑銘等の拓本を熱心に収集したのも、彼の美術を愛する精神によるものであろう」と書いてある。魯迅は美術に強い関心を示しているが反対に、音楽には少なく言及する。「このように視覚芸術に広く深い関心を示した魯迅であるが、不思議と音楽にはほとんど興味を示していない。太宰治の魯迅音痴説はなかなか鋭い洞察と言えよう」との藤井省三（2002：188）の一言で、多分太宰治の魯迅音痴説の大胆想像は多分大量の魯迅作品を参考にした後導き出されたのであろう。

2.2 旅行嫌いの「魯迅」

『惜別』での「私」と「魯迅」の初めて出会いのは松島見物の時である。松島は日本第一の風景である。こんな名勝を見物している二人も景色にあまり興味がない。松島について「私」は「僕はどうも、景色にイムポテンツなのか、この松島のどこがいいのか、さっぱり見当がつかなくて、さっきからこの山をうろうろしていたのです」と話をして、「魯迅」は「私」と同じ感想で「あまり静かで、不安なので」と松島に低く興味を示している。さらに、「魯迅」は松島の「人間の匂いが無い」静かさに対して、中国人はこの寂しさに全然我慢できないと自嘲している。

日本で有名な詩人芭蕉は松島を中国の西湖にたとえていたことがある。日本の文人、墨客たちも、昔から、中国の西湖を慕っていて、松島も西湖にそっくりだというので、遠くから見物に来るのである。しかし、「魯迅」はそう思わない。「魯迅」は浙江海がこんなに静かではないと思って、自分の故郷である西湖についても「生活の粉飾が多すぎて感心しません」と嫌がっている。実は、魯迅の友人である徐寿棠は自分の回顧録に魯迅が旅

行に興味がないと書いてあった。多分太宰治は徐寿棠の文章を読んだ後で、松島遊覧の事件に「魯迅」の旅行嫌いという性格を創ったと思う。

2.3 「魯迅」の思想

『惜別』の「魯迅」の思想は主に二つの方面を示していると思う。一つは「魯迅」の親日態度である。小説には「魯迅」は日本のことについて、ひたすら褒めを与えて、日本を模倣したいという願望が流れている。もう一つは「医学を辞め、文学に従事する」という思想の転換である。国を救えるのは「科学技術」ではなくて、「文学」のほう求められるはずという思想の転換である。その思想について小説は太宰側の見解で解釈している。

2.3.1 親日態度

『惜別』の「魯迅」の日本に対する肯定態度は「魯迅」像の特徴である。「魯迅」の親日態度は、魯迅本人は確か日本に好感を持っているのであるほか、太宰治の自大性格と創作の政治目的に関係もあると思う。魯迅は厨川白村の文明批判集である「象牙の塔をいでて」を翻訳し、その後書きに「別に隣国の短所をあばくことを通して国民に快感を与えるつもりではない。中国は今他国に侵入する野望がないし、わたしも他国の弱点を探るという使命を負っていない。だからそこまで力を尽くす必要はない」というので、『惜別』の魯迅は中日比較に、日本のことをよく褒めている。これも太宰治は魯迅作品の影響を与えられたのであり、自分の想像で魯迅の親日態度を誇張して小説に示している。それは、小説の中で「魯迅」が日本の「忠」をめぐる褒めたことである。

『惜別』の「魯迅」は「日本人の思想は全部、忠という観念に einen されているのですね」（太宰治, 1983: 320）と言っており、特に「忠」というのは日本思想の主の特徴であると強調している。「忠孝の思想は、お国から日本に伝って来たものじゃないですか」と「私」が言うと、「魯迅」は即座に否定し、中国の「忠」と日本の「忠」が違うと論じた。中国古来

の支配者の統治から「忠」は「妙に複雑なあいまいなもの」と述べ、支配者は「忠」より「孝」のほうを主張する「政策の意味が含められて勧奨された道徳である」という偽「孝」を批判した。日本の「忠」は「さっぱりで純粋な」と評価し、日本人が「聡明」で中国の二十四孝に騙されず、「偽善を勸で見抜く」という能力を持っていると述べていた。そのほか、「私」と「魯迅」の初対面に、「魯迅」は「いまの清国は、一言で言えば、怠惰だ」と慨嘆し、反対に日本はまじめと指摘している。科学技術という点から、魯迅は清国に「科学の猛威に対して何のなすところも無く、列国の侵略を受けながらも、大川は細流に汚されずとでもいうような自信を装って敗北を糊塗し、ひたすら老大国の表面の体裁のみを弥縫するに急がしく、西洋文明の本質たる科学を正視し究明する勇氣無く、学生には相も変わらず八股文など所謂繁文縟礼の学問を奨励して、列国には沐猴而冠の滑稽なる自尊の国とひそかに冷笑される状態に到らしめた」と非難し、「日本はいち早く科学の暴力を察して、進んで之を学び取り、以て自国を防衛し、国風を混乱せしめる事なく、之の消化に成功し、東洋における最も聡明な独立国家としての面目を発揮する事が出来た」（太宰治、1983：248-249）と、日本の学習力が強いという高い評価を与えた。

2.3.2 「医者を辞め、文学を目指す」思想転換

魯迅が文学志望に転換するのは、「幻灯事件」の後である。「幻灯事件」というのは、当時の医学専門学校での授業で、余った時間に映し出された日露戦争時のスライドで魯迅が見たのは、スパイを働いたとして日本軍に首を切られる中国人と、ぼんやり見ている周囲の中国人だった。「呐喊」の「自序」によれば、魯迅は先決は国民の精神改造であると考えた。しかし、太宰治は「幻灯事件」が魯迅思想転換の発端ではなく、当時の日本の文芸熱の影響で、深い思考を生み出し、自己の思想を次第に転換するという考えを持っている。言い換えれば、文学へ転換するのは「魯迅」自身の最初からの志望である。「幻灯事件」の屈辱感は思想転換の主な原因になれないと太宰治は解釈している。

また、「科学救国」について、『惜別』の「魯迅」は最初に「科学を娯楽に応用するのは危険です」と語り、つぎも「僕はエジソンという発明家を、世界の危険人物だと思っています。快樂は、原始的な形式のままで、たくさんなのです。酒が阿片に進歩したために、支那がどんな事になったか」と科学に不安を持っている。さらにだんだん科学を畏怖するになり、最後科学救国論を全部抹殺するという事にも至る。ようするに、小説の「魯迅」は科学に憧れから疑いに、また疑いから否定になっていく。そこで、留学期間に中国の問題の本質を認識して、「医者をやめ、文学を目指す」という思想に転換する。

一般の中国人としての魯迅のイメージと比べて、小説の「魯迅」像は少し微妙感を感じさせるが、我々は作品に受容性を持つべきである。「音痴」といい「旅行嫌い」といい、読者の前に生き生きとした「魯迅」像を描き出した。また、小説の「魯迅」の親日態度で、太宰治の日中和平の願望を強く感じられた。魯迅の文学転換についての解釈も日本人の視点から太宰治の独特な見解であり、戦時魯迅の研究にも太宰治の研究にも参考になれると思う。

3. 「魯迅」への評論

『惜別』の刊行された1945年から2013年まで、評論界では太宰治の『惜別』をめぐる、いろいろな意見が出てきた。特に小説の「魯迅」像について、批判の評論が圧倒的であった。批判について、「魯迅」像は太宰治の自画像といわれ、太宰治は魯迅の理解が浅いと非難している。しかし、その像について一概に批判するのは不公平であると思う。批判と反して、評論界でも「魯迅」像にプラス評価を与えるという受容がある。「魯迅」像に評論をつけるのは、それについてのマイナス評価とプラス評価を結び合わせて分析することが必要だと思う。

3.1 批判について

竹内好は日本で魯迅研究の第一人者と呼ばれる、最初に文章で『惜別』を批判した人である。彼は「藤野先生」という文章で、太宰治が「幻灯事件」への理解が誤りだと指摘した。「魯迅の受けた屈辱への共感が薄いたために愛と憎しみが分化せず、そのため、作者の意図であるはずの高められた愛情が、この作品には実現されなかった」（竹内好、2005：25）と批判して、「幻灯事件」で「魯迅」が体験した屈辱は誰でも理解できなかった。その後の『惜別』への批判も「魯迅について理解不足」ということが中心になっている。

さらに、竹内好（2005：194）は『惜別』が魯迅の思想を歪曲するものであると、太宰批判エッセイである「花鳥風月」で書き上げ、「作者の主観だけででっち上げた魯迅像——というより作者の自画像である」と述べた。その後『惜別』の「魯迅」への批判は上記のように、「主観すぎ」と指摘している。

川村湊は『惜別』が創作目的からいえば、失敗作だと考えている。『惜別』は「大東亜宣言」の「独立親和」を主題にした国策小説である。しかし、太宰治は私的なものしか提出してなかった。ようするに、『『惜別』においては、あまりに「公」的な言語が「私」的な言語によって蚕食され、無意味化され、カリカチュア化される」という川村湊（1991：70）の言うように、「公」的な側を作品に示していないかわりに、「私」的な側のほうが目立っている。ようするに、太宰治が創った「魯迅」像に「私」的なものが混ざり合うことが多すぎて、創作動機として「公」的なものも必要なので、最後に「私」的と「公」的も加えて、描き出した「魯迅」像は魯迅本人とのギャップ感を明らかに感じたという。

3.2 評価について

上記のマイナス評価について、たいてい小説の「魯迅」像は魯迅本人とギャップ感があり、太宰治が魯迅への理解が浅いと非難する。しかし、そのギャップ感にプラス評価を与える人もいる。日本で一番有名な魯迅研究

の専門家である藤井省三（2005：188）は「『惜別』は、竹内『魯迅』の衝撃により構想が破綻し、太宰自身の自己表白に終わってしまった、というような失敗作ではなく、むしろ竹内『魯迅』の観念性に対し奮起、『少年の如く大いに勢ひづいて』『中国の人をいやしめず、また軽薄におだてる事もなく、所謂潔白の独立親和の態度で、若い周樹人を正しくいつくしんで』描いた明るい青春物語と見るべき」と『惜別』に高い評価を与えた。「太宰が『惜別』で描く青年魯迅は、音痴ではあるが『キザ』で、にこやかに笑う個性的魯迅を描き出した点は、日本における魯迅受容史を考える際にも重要な意味を持つものである」（藤井省三，2005：189）という、国の依頼で執筆された国策小説というより、ただの個性的な中国留学生を描き出した青春物語である。読者の目の前には「魯迅」の姿が生き生きと浮かんでくる。

前述のマイナス評価とプラス評価と結び合わせて見ると、最初の評価には「魯迅」像が中国における魯迅本人の像に背く、太宰治の私的なものが混ざり込みすぎで、太宰治の自画像と批判する。そして日本の評論家である神谷忠孝は『惜別』の作品の分析を重視すべきだと言っている。小説を読む時は実際の魯迅像の認識を除いてから、「魯迅」像を見直すというこの立て直した「魯迅」像に基づいて、プラス評価を与えた。しかし、『惜別』の「魯迅」像に絶対的な評価をつけるのは難しいと思う。それは、時代背景や評論家の立場や評価の方法などの原因によって、評価の内容も変わっていく。つまり、評価の基準次第である。ようするに、評論界で「魯迅」像へのマイナス評価もプラス評価も、参考になれると思う。

おわりに

『惜別』の「魯迅」像は、確かに太宰治の自画像だと言える。「魯迅」像から「魯迅」の思想は太宰治がある程度の実事関係に基づいた上で、自己見解で、私的なものを描き出したものである。小説を読むと、中国人としては魯迅についての認識で、小説に描き出した「魯迅」像に納得できな

いところもあるが、「魯迅」像を一概に批判するのは容れられない。それは『惜別』という作品はノンフィクション小説ではなく、必ず事実を一切踏まえるとは限らないのである。つまり、『惜別』の「魯迅」像と中国における魯迅とのギャップ感を受容するのは必要であるという。「音痴」と「旅行嫌い」である「魯迅」の姿が読者の目の前に生き生きと浮かんでくる。それこそ、読者と小説の「魯迅」との距離感が少なくなって、「魯迅」思想への理解が増していくことになる。それは太宰治が『惜別』の創作動機として、中日お互いに理解し合い、中日和平を求めると小説を通して読者に伝えたいことではないかと思う。すなわち、『惜別』の時代背景と創作動機など、小説の「魯迅」像のプラス影響のほうがもっと重視すべきだと思う。また、「魯迅」像から、太宰治視点から魯迅について認識を探究できると思う。それも戦時太宰治への文学研究に重要な意味になる。中国において『惜別』について研究は少なく、客観的な参考文献が少なく、本論文の研究は小説の人物の分析にいろいろな不足がある。これから、「不足」のことについて、もっと研究を進めたいと思っている。

参考文献

- 1) 竹内好「花鳥風月」『新日本文学』第10号、1956年、194-195頁。
- 2) 奥野健男『太宰治論』新潮社、1984年。
- 3) 藤井省三『魯迅と日本文学：魯迅と太宰治—竹内好による伝記小説『惜別』批判をめぐって』東京大学出版会、2015年。
- 4) 奥野健男『『惜別』の解説』新潮社、1973年。
- 5) 太宰治『『惜別』の意図, 太宰治全集 12』筑摩書房、1972年。
- 6) 太宰治『『惜別』のあとがき, 太宰治全集第十卷』筑摩書房、1956年。
- 7) 小田嶽夫『『惜別』準備の頃, 太宰治全集 8』筑摩書房、1998年。
- 8) 太宰治『惜別』新潮社、1983年。
- 9) 川村湊「『惜別』論——“大东亚之和睦”的幻影」『国文学解释与教材之研究』第4号、1991年、70-73頁。
- 10) 张子康, 李博闻「魯迅文学作品对于『惜別』中魯迅形象的影响」『文学理论』第11号、2015年、158-160頁。

- 11) 董炳月「自画像中的他者太宰治『惜別』研究」『鲁迅研究月刊』第12号、2004年、57-69頁。
- 12) 朱捷「『惜別』論——以太宰治の戦争観和鲁迅形象为中心」、四川外国语大学、2014年。

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における
主人公の人物像について

惠州学院外国語学院2018年度卒業生 林 穂琦

■指導教員 康 伝金

講評

村上春樹は日本現代文壇で有名な作家だけでなく、世界文壇でも高い評価を獲得した。彼の作品は中国の読者によく知られていて、特に中国の若い読者に愛されている。『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は村上春樹が近年発表した長編小説である。この論文は文献分析法と帰納推理法を用い、主人公多崎つくるとを研究対象にし、彼の人生の成長段階を展開し、さらに多崎つくるとの人物像を分析する。主人公の人物像の分析によって、作品における「巡礼の年」の深い意味を探究する。

はじめに

村上春樹は日本現代文壇における優れた作家であり、世界文壇でも有名である。また、村上春樹は日本国外で人気が高く、中国でみんなが一番知っている日本の作家であり、彼の作品は中国国内で若年層を中心に広く読まれた。1979年、デビュー作である『風の歌を聴け』が発表され、1987年発表の『ノルウェイの森』は2009年時点でベストセラーとなり、これを

きっかけに全世界で「村上春樹ブーム」が起きる。その他の代表作に『羊をめぐる冒険』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『1 Q 84』などがある。2013年4月、長編小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（以下、『多崎つくると』と略称）が発表された。発売後、わずか七日間で百万冊を超え、トーハン発表の「2013年年間ベストセラー」総合2位を取った。そして、中国においても「村上春樹の突破作」と評価されている。

過去、村上春樹の『多崎つくると』に関する先行研究というと、国内外の学者は各方面から一定の研究があった。主に文体、人物研究、作品比較論と心理的な分析という四つの方面から考察した。例えば、林少華（2014）は「村上春樹の文体の美——『多崎つくると』を読む」で、作品の中に音楽の描写と比喩的な例文などを例にして、文体の独特な魅力を褒めた。人物研究の中に、『多崎つくると』の登場人物、物語の舞台、時代背景などを解明しようとした研究が多かった。平野芳信（2014）は『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論——鏡の國のたさき創」からの中に、文章の物語の時間、登場人物の名前などを研究対象にして分析した。近代ナリコ（2013）は「女神の役割、『村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』をどう読むか』の中に、「木元沙羅」この女性の人物は多崎つくるとの人生の中で重要な役割があるのを論じた。また、木部則雄（2013）が書いた『『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の精神分析的考察——グループ心性とコンテナの機能』の中に、『多崎つくると』をビオン、メルツァーの精神分析理論を中心に研究した。趙丹（2017）は『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の癒し効果」の中に、本文での具体的な癒しの過程を分析した。しかし、『多崎つくると』において、ただ「多崎つくると」この人物を対象にして分析する研究はほとんどない。

そこで、本稿では、まず、この小説に関して先行研究を参考に、小説の意味を深く理解する。そして、テキスト分析を用い、作品における主人公の成長の三段階を展開し、主人公の人物像を分析する。また、主人公「多

崎つくる」この人物を通して、読者にどのようなメッセージを伝えたいのか、作品における「巡礼の年」の意義を探し見ようと思う。

1. 『多崎つくる』について

小説『多崎つくる』は2013年4月に単行本で文藝春秋から刊行され、2015年12月に文春文庫として文庫化され、また同日に電子書籍版も配信された。日本国内でも海外でも、人気が高かった。小説は十九章に分かれており、第三人称の叙述方式を用いて語られる作品である。

あらすじは次のようなものである。主人公多崎つくるがただ死を考えていたことから物語が始まった。次にその原因は親友に絶交を言い渡されたことと述べた。高校時代から、多崎つくるは四人の親友いつも行動を共にしていた。完璧な共同体と見えるが、あるとき突然崩壊し、つくるは強い絶望に陥った。以来長年、つくるはその経歴を自分が心の底に隠し、誰にも告げない。鉄道会社に就職している36歳のつくるは女性の友人木元沙羅と知り合い、そして交際している。恋人沙羅の励ましによって、つくる自身が絶縁された四人の友人たちに会って直接話をするすることで、事態を打開するように勧める。

社会学者である橋爪大三郎は『多崎つくる』を「人間関係にうまくコミットできず、ミルフイユのように多層的で断片的な現実を生きることしかできないつくるは、巡礼の果てに孤立が自分の咎でなく、赦されているのかもしれないと予感する。単純な見かけの裏に奥行きが隠れていて、本当のところを掴ませない、適切に評するのが難しい作品に仕上がっている。」と評している。また、政治学者・東京大教授である宇野重規は著者は「あえて抑制的な態度をとっているように見える。そしてむしろ、痛みを抱えつつも、「かたちあるものをつくる」ことで、前に進んでいこうとする人間の姿を描き出そうとしている」と評価する。

実は、村上春樹は若者の精神的な世界を十分重視している。若者への「自我」を解説することは村上春樹の小説に若者の精神的な世界を探求す

る一つの重要なテーマである。村上春樹の作品を研究すると、日本の社会及び今の日本の若者の心理状態の理解にとって重要な意義がある（程燕，2017:8）。『多崎つくる』この作品は「成長」に関して、主人公が「自我」を探し始めた物語が描かれた。村上春樹の従来作品と違い、『多崎つくる』この作品で「自我」に直面することが初めて現れた。ですから、村上春樹は『多崎つくる』を通して何を主張しているのか、読者にどのようなメッセージを伝えたいのかを研究する価値がある。ということで、次に『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』の作品内容を分析することによって、主人公の人物像を探究する。

2. 主人公多崎つくるの人物像に関する分析

『多崎つくる』では、36歳の主人公多崎つくるは心の障害を克服して、女性友人木元沙羅の励ましによって旧友を訪ねることを通じて過去への巡礼を始めた。友人が何も言わず離れて行ったことに度々遭ったが、自分の心のトラウマに直面して、最後成功に自我を探し、積極的な態度で新しい生活に直面する。これから多崎つくるの成長の三段階を展開し、それぞれの段階で主人公の人物像を具体的に分析してみたい。

2.1 自我喪失の多崎つくる

小説の冒頭は「大学二年生の七月から、翌年の一月にかけて、多崎つくるはほとんど死ぬことだけを考えて生きていた」と書いた。小説は最初から多崎つくるが「暗い淵」に陥って、「虚無」である状態が現れた。続いて「多崎つくるがそれほど強く死に引き寄せられる」原因を明かした。それは彼はずっと親密に交際していた四人の友人たちに妥協の余地もなく唐突に追放された。その段階の多崎つくるは自我を失って、何の生气もなく、消極的な態度で生活を送っている。

2.1.1 親密な五人グループと「色」を持たない多崎つくる

高校一年生の夏に、多崎つくるは偶然に他の四人と一緒に同じボランティア活動を参加した。それをきっかけに五人は親友になった。

そして夏のキャンプが終わったとき、五人はそれぞれに「自分は今、正しい場所において、正しい仲間と結びついている」と感じた。自分は他の四人を必要とし、同時に他の四人に必要とされている——そういう調和の感覚があった。それはたまたまもたらされた幸運な化学的融合に似ていた。同じ材料を揃え、どれだけ周到に準備をしても、二度と同じ結果が生まれることはおそらくあるまい。(村上春樹, 2013:6)

上記の引用に、五人は調子が非常に合い、仲が非常に良い、相手は自分にとって不可欠の存在だと描いた。一切は運命が定まったことみたいにしてはちょうどいい。でも、この中に何か不安定な要素が隠れている。

五人グループの中に、男が三人、女が二人。他の二人の男の名前は赤松慶（アカ）と青海悦夫（アオ）で、二人の女の名前は白根柚木（シロ）と黒埜恵理（クロ）だった。多崎つくと違って、ほかの四人の名前にも色が含まれていて、多崎だけが色とは無縁だ。

そのことをつくるは最初から微妙な疎外感を感じるようになった。もちろん名前に色がついているかいないかなんて、人格とは何の関係もない問題だ。それはよくわかる。しかし彼はそのことを残念に思ったし、自分でも驚いたことに、少なからず傷つきさえした。

(村上春樹, 2013:6)

名前に色が含まれているかどうか、人格とは全く関係がないことがよくわかっているが、多崎つくるは自分と親友の違いを気になっていた。色の問題のように見えるが、実際はそれは多崎つくるが不自信な表現である。つまり、色彩を持たないつくるは「自己を肯定できていない、自己認識の

乏しい多崎つくる」と解釈しても良いのではないか。

2.1.2 親しい仲間の関係の結束

大学二年生の夏休みに、多崎つくるはいつものように名古屋の実家に戻った。他の四人に何回電話をかけたが、誰とも連絡が取れなかった。最後アオからの電話をできた。しかし、「もうこれ以上誰のところにも電話をかけてもらいたくないんだ」の返事もらった。何の理由も言わずそのままに親友を追放された。

その夜はうまく眠れなかった。気が高ぶり、いろんな多くの思いが頭を去来した。しかし結局のところそれらは、いろんな形状をとったひとつの思いに過ぎなかった。方向感覚を失った人のように、つくるは同じ場所をただぐるぐると巡回していた。ふと気がつくと同じ場所に戻っていた。やがてそのうちに彼の思考は、頭の溝がつぶれたネジのように、前にも後ろにも進めなくなった。

(村上春樹, 2013 : 31)

東京に戻ってからの五か月、つくるは死の入り口に生きていた。底なしの暗い穴の縁にささやかな居場所をこしらえ、そこで一人きりの生活を送った。寝返りを打ったら、そのまま虚無の深淵に転落してしまいそうなぎりぎりの危うい場所だ。しかし彼はまったく恐怖を感じなかった。落ちるといのはなんと容易いことか、そう思っただけだ。

(村上春樹, 2013 : 39)

電話が取れなかったことは多崎つくるを十分な不安にさせた。異常な信号が出るみたいに四人との関係は危ない状態が現れた。実際に多崎つくるはずっと「一人あとに取り残されるのではないかという怯え」を「常に心の底に持っていた」。その情報を受けた後、多崎つくるは完全に深淵に落ちた。自分がずっと憂えていることはやっぱり起きた。この時の多崎つ

るは巨大な「喪失感」と「孤絶感」よりもっと言えない絶望感を持っていた。「死」のことだけ考えていて、世界の存在あるいは自分の存在は無意味になったのである。上記の描写によって、主人公が何も求めていない、何もしたくないという自我を失った人物像を塑像した。

2.2 自我探しの多崎つくる

死亡の間際をさすらったその約半年のある夜、多崎つくるは激しい嫉妬に苛まれる夢を見た。その嫉妬の夢からこそ五か月以来死への憧憬を打ち消した。それから、大学生灰田文紹と女性友人木元沙羅と知り合った。そして、多崎つくるは木元沙羅の助けによって過去への巡礼を始めた。

2.2.1 新しい仲間との知り合い

死への憧憬を打ち消した多崎つくるはだんだん正常な生活に戻った。しかしながら、「多崎つくるという名のかつての少年は死んだ」。「彼はもう完璧な共同体を信じてはいないし、ケミストリーの温かみを身に感じることもない」（村上春樹、2013：49）。その後、大学のプールで二歳年下の学生「灰田」と知り合った。何度も話し合っているうちに二人は仲が良くなり、二人の会話の話題も広い範囲になった。しかし、最後灰田はやはりつくるのもとを離れた。

しかし今回の灰田の消滅はなぜか、前のときほど深い混乱をつくるにもたらさなかった。彼に捨てられ、去られたという苦い思いもなかった。灰田を失ったことによって、彼はむしろある種の静けさに支配されることになった。（村上春樹、2013：130）

灰田の消滅に対してつくるは混乱にならなかった。四人のグループから放り出されたことと違って、今回つくるはよく落ち着いている。灰田は四人の親友と同じ、灰という色はちょっと暗い色が名前に含まれている。この時のつくるは前より心が強くなるようだ。

2.2.2 「巡礼」の始まり

十六年後、最初に女性友人木元沙羅と会った時、つくるは特別な感覚を持っていたのである。ただ四回のデートして、誰にも言わなかった「乱れなく調和する共同体」のことを木元沙羅に打ち明けた。沙羅もつくるが「心の問題」を抱えているのが分かって、その心の傷をただ表面的に塞いできたように見えるが、内側では血はまだ流れていることも分かっていた。

「あなたはナイーブな傷つきやすい少年としてではなく、一人の自立したプロフェッショナルとして、過去と正面から向き合わなくてはいけない。自分が見たいものを見るのではなく、見なくてはならないものを見るのよ。そうしないとあなたはその重い荷物を抱えたまま、これから先の人生を送ることになる。」 (村上春樹, 2013: 106)

そして、木元紗羅の励ましと助けによって、当時グループから抜かされた理由を探した。紗羅は四人の現住所を尋ねて、すでにシロが亡くなったと発見した。そこで、つくるはアオ、アカ、クロに順番で訪ねた。

アオを訪ねた後、つくるはシロのこと少しずつわかった。「シロはおまえにレイプされたと言った」とアオはつくるに言った。つくるは驚いた。

「おれたちにしても百パーセント、シロの言い分を信じたわけじゃない。正直な話、ちょっと変だと思うところもなくはなかった。でもそれがまるっきりのフィクションとは思えなかった。彼女がそこまではっきり言うからには、そこにはある程度の真実は含まれているはずだ。そう思った」

「だからとりあえず僕を切った」 (村上春樹, 2013: 164)

ここでつくるが追放された原因が明らかになった。

それから、つくるはアオに「僕は昔からいつも自分を、色彩とか個性に

欠けた空っぽな人間みたいに感じてきた」のを打ち明けたが、意外に「おまえは空っぽなんかじゃないよ」、「おまえは、他のみんなの心を落ち着けてくれていた」の返事を聞いた。常に心の中に持っている怯えをアオに開けた時、昔の親友は自分が「共同体」に必要とされていることを認めた。

次にアカを訪ねる。アカは「おまえはもともとそんなことをする人間じゃない。それはよくわかっている」を言い、「シロはおそらく心を病んでいた」と考えていた。

「よそのものになった僕を切る方が、シロを切るより実際的だった。そういうことか？」

アカはそれには答えず、浅く長いため息をついた。「考えてみれば、おれたち五人のうちでおまえがいちばん精神的にタフだったのかもしれない。おっとりした見かけのわりに、意外にな。残りのおれたちには、外に出て行くだけの勇気が持てなかった。

(村上春樹, 2013: 196)

アカから見れば、つくるはグループでは意志が一番強い人である。つくるだけは外に出る勇気があり、他の四人はすべて育った故郷、名古屋に残った。つくるにとって、これは彼が以前からよく考えていた自分と完全に違った。このイメージは完全に思わなかった。彼は自分の親友にとって不可欠な役割をしていることをだんだんわかった。そして、アカは誰にも言わなかった「打ち明け話」をつくるに告白した。

2.3 自己回復の多崎つくる

アカ、アオを訪ねることを通して、多崎つくるはかつての旧親友から多くの情報もらった。そして、つくるは最後の親友「クロ」への旅を始めた。十六年前にグループに疎外された真相を探して、昔の友達と新たな関係を建立した。この巡礼の旅では、つくるは色彩を持っている一人一人から認めをもらい、魂の底からすべてを理解して受け入れられたのである。

彼は成功裡に自己を探し、「巡礼」の終わりの後はもっと積極的な姿の自分の人生に直面する。

2.3.1 最後の親友への訪ね

最後つくるはフィンランドへ飛び、クロを訪ねに行った。クロは、つくるがシロをレイプすることは最初から信じていなかったのをつくるに語った。そして、かつてつくるのことを好きだったと打ち明けられた。シロのことを語り合った時にクロがつくるに次のことを言った。

私としてはまずユズを回復させなくちゃならなかった。それがその時点での、私にとっての最優先事項だった。あの子は命取りになりかねない重い問題を抱えていたし、私の助けを必要としていた。君にはなんとか一人で冷たい夜の海を泳ぎ切ってもらうしかなかったんだ。そして君にならそれはできるはずだと私は思った。君にはそれだけの強さが具わっていると。(村上春樹, 2013: 298)

シロが「精神的にそれくらい深刻な問題を抱えていた」ひいては「切羽詰まったところまでできていた」の程度に至ったことをよく分かっていた。クロしかシロのことを護れなかったのである。そのためには、つくるを切らなければならなかったのである。

別れる時、クロはつくるを色を欠いていなく、とても立派な、カラフルな多崎つくるであるとつくるに真剣に伝えた。ここから見れば、つくるは親友における重要な地位を持っていた。色彩を持たないつくるではなく、特別な色を持つつくるであった。みんなの心の中に、つくるが一番強い存在であると思っていた。

2.3.2 「巡礼」の帰り

「巡礼」の目的は遥かな聖地を参拝することだけでなく、聖地から帰ってから日常生活に戻るの方が重要である」と賈慶超(2013: 57)

は述べている。沙羅に選ばれるかどうかはわからないけど、つくるがどうしても沙羅を手に入れることにした。東京に戻って、午前四時前に沙羅に電話をかけた。素直に「君のことが本当に好きだし、心から君をほしいと思っている」と打ち明けた。

彼の心は沙羅を求めている。そんな風に、心から誰かを求められるというのは、なんて素晴らしいことだろう。つくるはそのことを強く実感した。とても久しぶりに。あるいはそれは初めてのこともかもしれない。もちろんすべてが素晴らしいわけではない。

(村上春樹, 2013 : 370)

つくるは初めて「心から誰かを求められる」のは「素晴らしい」ことだと感じた。「求めているのは意識ではなく、これまでの語りの流れから言えば意識下にある自我、言いかえれば本当の自分が求めているのである。本当の自分の声こそが、自分を納得させ、満足させ、正直にさせると語っているのである。たとえ沙羅がつくるを選ばなくとも、また、自我のエネルギーが湧き出てくるのだろう。(中略)沙羅の選択は、つくるの人生を、つくるが考えているのとは、別の新たな道を指し示す可能性を秘めている」と太田鈴木(2015 : 27)が指摘した。つまり、沙羅が自分を選択するにせよ、次の道に進もうとするとと言えるのだろう。

3. 『多崎つくる』における「巡礼の年」の意義

「巡礼の年」という言葉はタイトルにあるだけではなく、小説でもレコードの名前として何回現れた。新明解国語辞典によれば、「巡礼」という言葉は「幾つかの決められた聖地や霊場を順次に参拝して歩くこと」の意味である。作者はつくるが旧友を訪ねることを過去への「巡礼の年」と呼び、以上の主人公の人物像の分析から見て、「巡礼の年」は実は二つの深い意味があると考えている。

3.1 成長の道

村上春樹が「自分の以前の作品は、人と人の「一対一」の関係を述べたが、『多崎つくる』では「一対四」だ。それは人と人の連絡、共鳴にますます注目するようになったから。」と言った。「若い時に、人々がダメージを受けたらわざと隠し、いつも忘れたいけど、時間が経つについて、少しずつ封印を開け、傷を正視し始める。傷が大きくなるほど、克服できる人は熟している」と彼が言った。(趙丹, 2017: 40)

成長は自我を肯定する過程と言ってもいいのである。他者の関心を通して、一歩ずつ暗闇から脱出することができる。もしずっと逃げていたり、隠れたりすれば、永遠に成長できないのである。つくるが巡礼をして、過去の傷に直面することにしたからこそ、自己を回復することに成功できた。この勇気が成長の道でなくてはならないのである。

作者は若者が家族の庇護を離脱し、遥かな旅に出なければ、生命への深い理解と生活への全面的な感じができない、本当に成長できないと伝えたいと思っている。だから、『多崎つくる』における「巡礼の年」はつくるの「成長の道」と言えるだろうと思われる。

3.2 心癒しの旅

「この小説は、主人公つくるが心の傷を癒すために過去へ「巡礼の旅」をして、一歩ずつ影から出て、癒されたという過程を描いた作品である」(趙丹, 2017: 2)と言われる。つくるは最初はずっとグループに疎外されたことを心の底に隠し、十六年ほど誰にも言わなかった。沙羅が言った「つくるには何かしらの問題を心に抱えている」のように、心の病を癒すために、隠された傷と正面から向き合わなければならない。

つくるは「僕はこれまでずっと、自分のことを犠牲者だと考えてきた。わけもなく苛酷な目にあわされたと思い続けてきた」と考えていたが、「でも本当はそうじゃなかったのかもしれない。僕は犠牲者であるだけじゃなく、それと同時に自分でも知らないうちにまわりの人々を傷つけてきたの

かもしれない」(村上春樹, 2013: 319) と反省した。実はつくるだけではなく、シロ、クロ更に小説の全員にしても傷つけられたのである。それゆえに「人の心と人の心は調和だけで結びついているのではない。それはむしろ傷と傷によって深く結びついているのだ。」(村上春樹, 2013: 308)

今度、つくるは巡礼を通して、真に過去の親友と直接交流することによって、自分が相手を必要としていて、しかも自分はグループの中で中心的な存在だと分かった。彼らの目を通して、自分を再度認識した。ということで、「巡礼の年」は「心癒しの旅」と考えられる。

おわりに

本稿では、村上春樹の小説『多崎つくる』の主人公多崎つくるを研究対象に、彼の人物像を分析した。まず、『多崎つくる』について、内容などを紹介した。そして、作品における主人公の成長の三段階、「自我を失った多崎つくる」、「自我を探す多崎つくる」、「自己を回復する多崎つくる」それぞれをテキストを中心に分析し、人物像への理解を深めた。つくるは最初は人間に不信感を抱き、自己を肯定できていないイメージを与える。恋人木元沙羅の助けと自分の努力で過去に直面することにして自我を探す。16年ぶりにかつての仲間を訪ねた巡礼の旅を通し、だんだん心を開いて心の傷を癒していた。最後は自我探しに成功し、自己を肯定した。

さらに、『多崎つくる』における「巡礼の年」の意義を考察した。作者は巡礼の旅を借りて主人公の自己探求の成長経歴を明らかに示す。また、「巡礼の年」は心が癒される旅である。作者は読者に心の交流が大事だし、若者たちが勇敢に苦痛に直面し、自我に直面し、積極的に人生に直面することを伝えたい。『多崎つくる』は単純的な青春小説ではなく、現代社会における若者の自己認識と精神問題を反映した小説と言えよう。本論文は人物像に対する認識はまだ足りなく、これから、深く研究する必要があると思っている。

参考文献

- 1) 村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』文藝春秋、2013年。
- 2) 木部則雄「『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の精神分析的考察—グループ心性とコンテイナーの機能」『白百合女子大学研究紀要』、2013年、101-122頁。
- 3) 平野芳信「『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論—鏡の國のたさき創」山口大学、2014年。
- 4) 近代ナリコ、女神の役割『「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」をどう読む』河出書房新社、2013年。
- 5) 太田鈴木、村上春樹「『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』一心から誰かを求められる素晴しさ」昭和女子大学、2015年。
- 6) 倉持保男ら『新明解国語辞書第七版』三省堂、2015年。
- 7) 赵丹「『没有色彩的多崎作和他的巡礼之年』的心理治愈作用」东南大学、2017年。
- 8) 程燕「村上春树小说“人生选择”主题论」曲阜师范大学、2017年。
- 9) 贾庆超「自我追寻的失败与成功-比较『且风且吟』」与「没有色彩的多崎作和他的巡礼之年」『文学青年家』第33号、2013年、55-57頁。
- 10) 林少华「村上春树的文体之美—读『没有色彩的多崎作和他的巡礼之年』」『艺术评论』第6号、2014年、109-114頁。
- 11) 谢淑媛「从五行色彩学说看村上春树作品中的人物形象—以『没有色彩的多崎作和他的巡礼之年』为例」『景德镇学院学报』第32号、2017年、29-33頁。